



國木田哲夫君

田山花袋君

宮崎湖處子君

佐々木信綱君

石橋愚仙君

松岡國男君

新體詩集
山高水長

繁野天來君

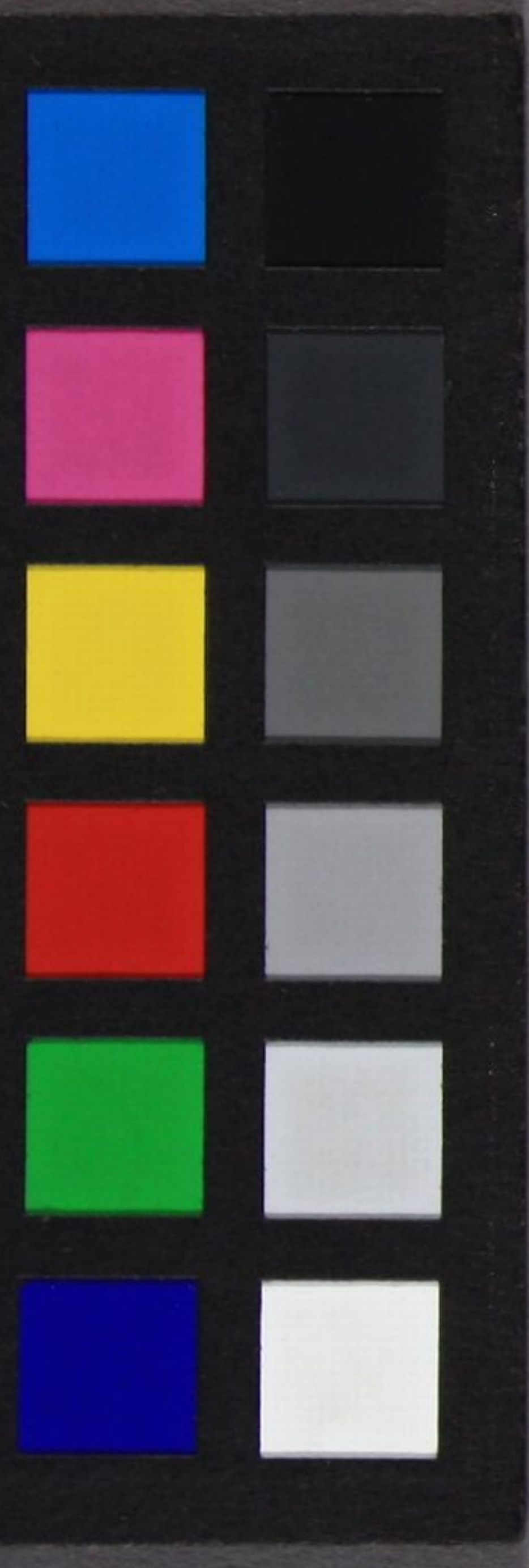
正岡子規君

大町桂月君

太田玉茗君

重松朋水君

桐生悠々君



詩
集

山

亭

水

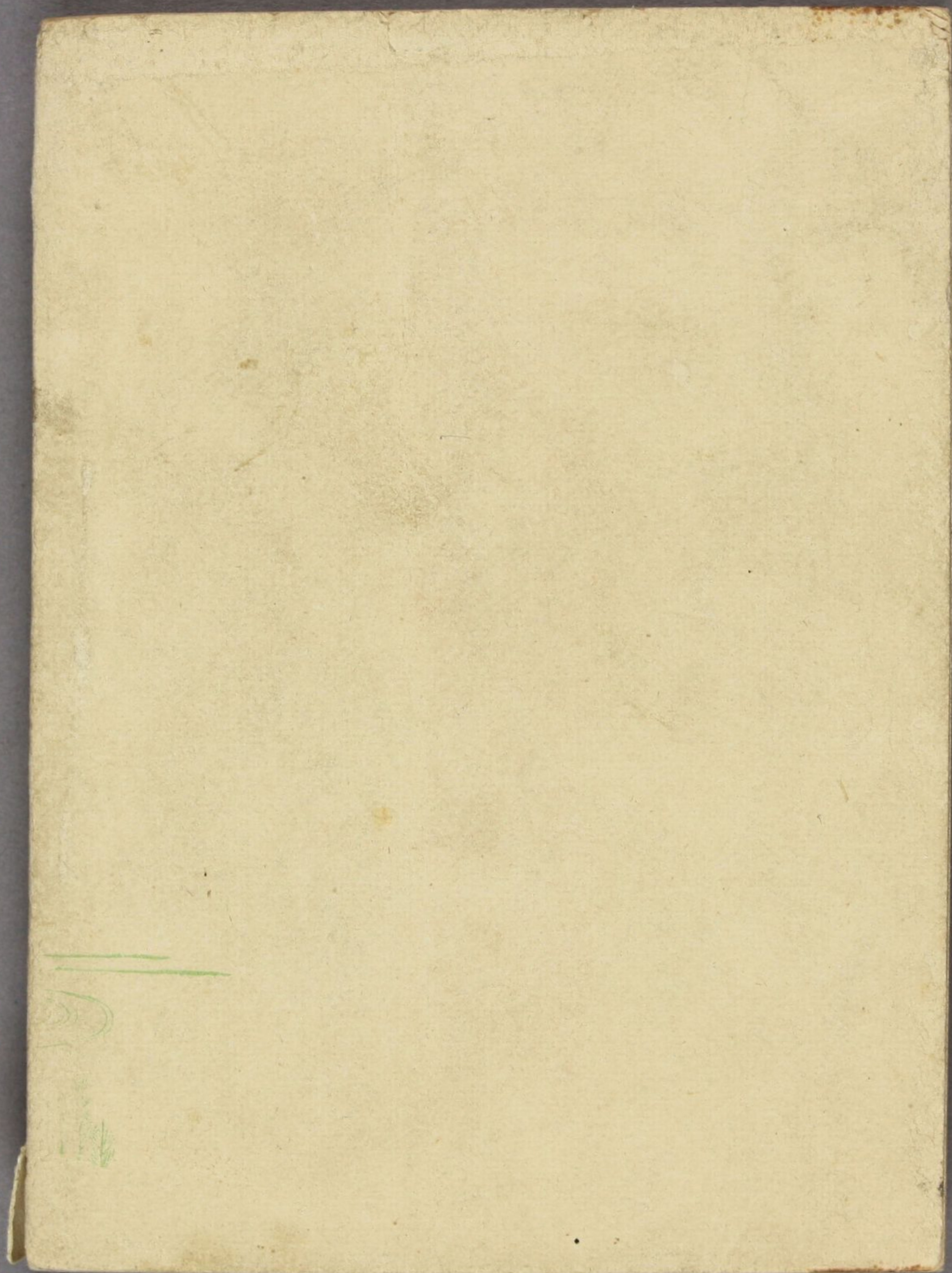
長

增

屋

詩

古



新體
詩系
山高水長

山
高
水
長

目次

| | |
|------------|-------|
| 獨歩吟 | 國木田哲夫 |
| ゆめうつゝ外十六篇 | 一 |
| つかね緒 | 田山 花袋 |
| さうび外二十一篇 | 三九 |
| 郷語 | 宮崎湖處子 |
| 坊や、坊や外二十篇 | 七一 |
| そなれ松 | 佐々木信綱 |
| かの松かげ外三十二篇 | 九三 |
| 仙堂曉夢 | 石橋 愚仙 |
| 嘯大空外二十五篇 | 一三七 |
| 野邊の小草 | 松岡 國男 |
| かなしき園生外十八篇 | 一七九 |

雨聲鳥語集

不夜城外六篇

繁野 天來

微笑

正岡 子規

外四篇

二三七

山村水郭

大町 桂月

今日ばかりの命外二篇

二七一

はなれ駒

太田 玉茗

はなれ駒外二十三篇

二八三

梢の雫

重松 朋水

れむり外十一篇

三三九

忘れ草

桐生 悠々

英雄の事業外十篇

三六三

目次畢



獨 步 吟

ゆめうつく

國木田哲夫

昨夜の夢のあやしさを

語りつくさんすべもがな

ゆくへも知らずさすらふは

我身か、あらず、影なるか、

暗きをたどるをのこあり

仰げば空の星消えて

常世とこよの闇やみの光なし

とばかりありて星一つ

とばかりありて二つ三つ

かゝやき出でぬくれなゐに

見る間またちまちむらさきに

我身か、あらず、影なるか、

をのゝき立てるをのゝあり

夢とみるゝ夢ならで

我身くすしくなりにけり

心たちまちをのゝきて

あはれ我身と叫びたり

とばかりありて星飛びぬ

とばかりありてたまゆらぎ

我身くすしくなりにけり

夢さめぬ朝日のぼりて

かぎりなし天のはるゝ

あかつきの光は清し

風吹けば青葉かゝやき

鳥鳴きて今日けふも變らず

いかなればくすしかりけん
この我身昨夜の夢に

夕闇遠し獨りして

小川の岸をたどりつゝ

仰けば高し色深し

瑠璃の大空雲たえぬ

見はてのかざり山見えす

吹き送る風は袂をひるがへし

うたふ聲森をへだてゝ聞ゆなり

牛ひける童は見えす鐘の聲

遠近をちこちの寺にひゞきつ獨りゆき

ものを思へば、はてもなし

我身あやしど見し夢は

夢よりさめし夢なるか

夢にあやしど見し星は

色に光に變りなし

現うつしの今が夢なるか

夢みなん、いざ今夜また

星飛びて月も碎けよ

底さけて眠れる火山

降りそゞげ焔の雨
 をのゝきさめんかくて吾
 夢のうちにもうつゝ世の
 にぶき眠の迷より

すみれの花よ

すみれの花よ今日までは
 なれをめでにしわがこゝろ
 世の常なりし淺かりし
 さばかりわれは塵ふかき

浮世の巷さすらひし

夢よりさめしこゝちして
 さめし夢をばはかなみつ
 まなざしにぶく此丘を
 ゆきつもどりつせしまゝに
 はからずなれを見いだしぬ
 朝露かはる日影にて

天津ひかりよ白露よ
 すみれの花よ今日よりは

なれが友なれ、涙こそ
あふれて落つれ、わがこゝろ
たゞひと時に静りぬ

友としなれをつくぐと
ながめいりにし其時は
大空たかく仰がれて
心はひくゝへりくだり
人の世ならぬあめつちの
廣さを家とおぼへたり

たゞ願くはとこしへに
なれを友としよるこぼん
たゞ願くはわがこゝろ
とこしへまでも變らざれ
なれを友としよるこびて

わがこゝろ

風をあらみ

浮世の波にさそはれて
うは濁りせるわがこゝろ

暫時しばしは月よ居すまひて
清きすがたを宿せかし

水際のすみれ

曉やみの霧はれて
谷の清水の底清し
水際にさけるつぼすみれ
影をさかやにうつしけり
しばし汲む手もたゆたひつ
るみし少女や人なりし

友人某に與ふ

其一

いざや君

たびたゝん

猜疑の暗鬼

住まぬ國に

何處にもあれ

鳥なかずども

花咲かずとも

月照らずとも

其二

父は子に教へて曰く
わが子、こゝろせよ

門を出れば

敵あり七人

其子は老ひぬ

父となりぬ

教へて曰く

わが子、こゝろせよ

門を出れば

敵あり七人

其三

もろどもに

神にいのらん

あはれ世の人

神をわらふも

せめては人を

信ぜんことを

亡友を懐ひて

君とわれと

幽明、境をへたつれども

われ君を懐ふいやふかし

われ君を懐ひ

君世に在さず

高あまにのぼりてたゞずめば

天あまのはるく雲くもきにて

悠々たり蒼空の色

夕照遠近にみちぬ

君を懐ふて感に堪へず

徘徊俯仰顧望する時

時の羽は風かぜ耳邊をかすめて飛び

永遠おもかけの俛眼底に動きぬ

夏來りぬ

丘の白露ふみわけて
 のぼる朝日を迎へなん
 青葉かざして日の光
 めくらむまでに仰ぎなん
 わだなる夢はさめはてぬ
 わかさ心は躍るなり
 のぞみは高し天津空
 思はひくし、あゝわか神

そのうた

夕ぐれ時をかなしとて
 泣きつる我をわきもこが
 泣きて歌ひて慰めし
 歌のかずく忘れねば
 一人うたひて一人ゆく
 其歌かなしいかにせん

若鳥

翼をれにし若鳥を
 わはれど君もおぼすべし
 此世の望高かりし
 ますらをのこの翼をば
 うちし獵夫さつをや誰なりし
 憎しど君はおぼさずや

我身

波に漂ふ木葉このはなり
 月にこがるゝ胡蝶なり
 我身一つをたとふれば
 木葉たゞよふ波荒らく
 胡蝶こがるゝ月高し
 わはれ我身をいかにせん

晃山の春

高峰たゞよふ朝霧に
 白銀しろかねつゝむ雪晴れて
 朝日まばゆくてりはえぬ
 梢の小鳥聲清く
 池のさゝなみ影あかし
 みぎはの花も咲きいでぬ
 川すを遠く眺むれば
 空もかすみて見はわかず
 都の春や老ぬらん

行雲流水

人里遠き深山にも
 笑ひて咲けるすみれあり
 浮世はなれし此村の
 こかげに眠る墓もあり
 高嶺たゞよふ雲あはく
 谷を流るゝ水さよし
 わが身一ついかにせん
 わが身一ついかにせん

人のすみか

人のつくりし浮世より
 のがれ出づべきすべはあれど
 人をつくりしあめつちの
 外にのがるゝすべやある
 人の獄舎ひどやは浮世なり
 人のすみかは天地てんちなり
 神をば知らんすべもがな

雲 影

さゝ波立たぬ湖は
 雲の影こそ映るなれ
 ものを思はぬわが心
 天津御空を映るなる

たき火

一

逗子の砂やま草かれて
 夕日さびしく残るなり
 沖の片帆の影ながく
 小坪の浦はほどちかし

箱根足柄、雪はれて

こがねの雲を戴きぬ
 ゆふばえ映る汐ひがた
 飛びこふ千鳥こゑ寒し

落葉たゞよふさどがはの
 葦間にのこるうすこほり
 ふみて碎きて飛びたちぬ
 羽音したかし、しぎ一羽

小舟こぐ手もたゆみたり
 富士の高峰をみかへりて

今日も暮れぬとふな人の
歌はさくべしたび人も

二

濱邊につどふわらべあり
みるま忽ちおのがじと
水際あさりてゆきせり
拾ひし木々を積み上げぬ

潮風さむし身に沁めば

わらべは小枝をりそへて
たき火いそぎぬあやにくに
ひろひし木々はうるほへり

かたみに吹けど煙たち
たばしる涙ふきあへず
かたみに笑ふ際^{ひま}くれて
かはたれ時となりにけり

ゆふぐら晴れて星一つ
影をさやかに映すなり

干潟の千鳥みえわかず
相模の灘は暮れにけり

三

節ありあはれ歌のごと

童は水際にたちならび

「伊豆のやまふきおくれ
野火をいざのふ風あらば」

鬼火か、あらず、いさり火か

伊豆の山こそやけそめぬ
冬のたび人ゆきくれて
のぞみて泣くはこの火なり

わらべは指してうれしげに
もろ聲あはせうたひけり
「伊豆のやまふきおくれ
野火をいざのふ風あらば」

かはたれ時の濱遠く
罪なき聲はたいよひぬ

海の女神はこたへせり
みち來る汐はさゝやぎて

四

童のかへり遅しとて
母なる一人よびたてぬ
「夕暮さむしいつまでか
淋しき濱にあそぶぞと」
稚きわらべげにもとて

砂山さしてかけゆきぬ
つく友どちそのまゝに
たき火をすてゝ走りたり
かしらの童ふりかへり
濱のこなたを見下しぬ
風は炎をいさなひて
今しも荒く燃えたちぬ
うれしどのみは思へども
童はそこに居ならびて

わが火もえぬと叫びつゝ
家路をさして馳せさりぬ

五

海暮れ野くれ山くれて
冬のさびしき夜となりぬ
逗子の濱邊は人げなく
あるじなき火の影あかし
と見る、人あり近寄りぬ

足おと重したび人か
たき火慕ふは袖ひちて
かはかす間ひまもなかりしか
火影にうつる顔くろく
額にきざむ皺ふかく
六十路にあまる髯枯れて
衣のすそはやぶれたり

ふるさと遠くたびねして
ゆくえも知らずさすらふか

ゆめは枯野にさめやすく
草をまくらの老の身か

六

あはれ此火よたがわざぐ
かたむけなしとかざす手は
炎まぢかくふるひたり
まなさしにぶく見まはしぬ
身うちの氷とけそめて

心ゆたかになりにけり
燃ゆる炎のかなたには
昔のわが身うかびたり
なごさゆたかに満ち來なる
汐はまさごどしたしみて
さゝやく音はおのづから
おきながなみだ誘ひけり
仰く大づら星さえて
霜をつゝめる天の河

伊豆の岬をゆびさしぬ
天のはるく人こひし

七

ひぢし衣もかはきたり
残りすくなに燃えつきぬ
たき火の炎かすかなり
おきな今はど、杖とりぬ

小坪のかたは道くらし

ゆき去りかぬしたび人は
あとふりかへりたゝずみつ
たき火のぬしをことぶきぬ

有明ちかく月さえて

逗子のうら人ゆめふかし
伊豆の孫やま火はきえて
いさり火のみずのこるなる

里の童がたきし火は
さすらふ人の足跡は

どこしへの波おともなく
夜半のみち汐かき消しぬ



つ
か
ね
緒

田山花袋

さ
ら
び

さぬ縫ふきみがはこの中に
入れて置きつる美しき
さらびの花を見しやきみ

ゑがける如くはなやかに
燃ゆるが如くくれなゐに
にはへるはなを見しやきみ

黙頭く君が手をとりて
まことに君は見たるかと
われは泣くなり嬉しさに

ひとつ家

見わたすかざりはるくくと
さはる物とてあらざれば
月は照りにもてりわたり
風はあれにもあれまさる

尾花がなかにひと筋の
路はあれどもさとどほみ
行きかふ人のあと絶えて
訪ひ來るともの影もなし

かくもさびしき冬がれの
野中にたてるひとつ家に
住まへる者はあはれ誰ぞ
やさしき君とこのわれと

わが跡

一ツ見えつる帆のかげも
いつしか遠くなり行きて
立つはしら波寄るは潮

秋のゆふべのうらさびし

いそ山越えて見かへれば
過ぎて來にけるわが跡は
ひと筋ながくのこるなり
夕日さびしき砂の上に

あはれはかなきその跡を
誰かは知らんわび人の
なぐさめかねて一人して
狂ひありきしあとなりと

何とはなしに

いかなる故とも知らなくに
 なみだ溢れてとゞまらず
 何故ありとも覚えぬに
 心くるひてたへがたし

前なる海には千どりなき
 うしろの松には風さけぶ
 あゝわが心いかなれば

かくは悲しくなりつらん

月の夜半

思ふこゝろをのこりなく
 あかして君にかたりしも
 今宵のどとき月夜にて
 桂のはなも咲きにはほふ
 いとしづかなる夜半なりき

更けたる野邊をたゞ二人

うれしく共にたどりしも
 今宵のこどき月夜にて
 霞のころもはる／＼と
 夢にも似たる夜半なりき
 垣根にちかくしたひ寄り
 きみが小琴をきゝし夜も
 しげれる竹のひまとめて
 君がすがたを見てし夜も
 いづれか月の夜半ならぬ

月はいよ／＼ふけ行きて
 よする白なみおどたかし
 つれなき君よきみはいま
 何處にありていかにして
 見てやおはするこの月を

森 かげ

もりの陰にてをどめ子と
 泣きて別れしふるさどに
 われは歸らんよしづなき

浮世のわざのつらくして

せめては似たるもり陰を
野邊にもとめてわけ入りて
かなしくつらさわが戀を
泣かばやあはれたいひとり

夕ぐれ毎に

夕ぐれ毎にたちいで、
うれしき君が琴の音を

きかんと我はねがへども
中をながるゝおほ川の
むかひの岸のとほくして
たえくゝなるを如何にせん

夫婦島

夕日さびしきあらいその
向ひに見ゆるはなれしま
何といふなる島ならん

松立つさまもかもしろし
 かさなる岩もかもしろし
 何といふなる島ならん

何といふなる島の名と
 をりしも逢へる舟びとに
 わがたつぬればゆふ日影
 にほへる島をふなびとは
 心ありげにうち見やり
 夫婦のしまとぎをしへたる

一つのみなるしまなるを
 めをとといふはいかにぞと
 重ねて問へばふな人も
 大息つきつゝうなづきて
 然なりと言ひぬ微かにも

然なりこの島いにしへは
 一つのみにはあらざりき
 わが大祖父の世のころは
 二ツ並びてありたりき
 然るをあはれいつの世の

いつの海嘯のときならん
 一つはなみにうばゝれて
 ひとつ残りぬあはれにも
 かくときゝたるその時の
 わが悲しさやいかなりし
 心もあらじと思ひつる
 島のうへにもかくばかり
 悲しき事のある世かど
 思ひしときのかなしさは
 あはれまことに如何なりし

あふるゝ涙ぬぐひつゝ
 海原とほく見はたせば
 一つのこれるそのしまに
 夕日のかげのきえゆきて
 あら波あるゝあら磯に
 なくや千鳥のこゑかなし
 あはれこの島ひとりして
 いつまで立つかわだ中に

離れ小島

漕ぎ行くまゝに近きて
 離れ小じまのまつ原は
 うつし繪よりも美しく
 あらはれ出でぬわが前に
 波のしらべもかすみたり
 ゆふべの風もふき絶えぬ
 おほろに月はさしそひて
 松とはなとのかげあはし

かのへやかくも美しくしき
 この松ばらの中にしも
 わがなつかしきこひ人は
 待ちてある也おそしとて

をりにふれて

春雨かをるゆふぐれに
 おぼろ月夜のはるの夜に
 しづかにきかばいかばかり

嬉しからんをちりあくた
まよふちまたの中にして
われはさく也きみが弾く
あたらやさしき琴の音を

誰が墓

書もをぐらきすぎむらの
小笹がくれのいつの世の
誰が墓ならん二つ三つ
倒れしまゝにのこるなり

あはれこの墓見るごとに
われは思はぬことづなき
幾百年の前の日と
いく百年の後の日を

ある夕

思ひあまりてたいひとり
覺束なくもゆふぐれの
むなしき空をながめつゝ

涙にそでをぬらす時
うれしや雁はなきて來ぬ
君住むやまのかなたより

ゆ め

君とおのれとたゞふたり
人氣なき山のおくにして
思ふこゝろをのこりなく
語りあひたる夢なるを
はかなき夢とはわれいはじ

湖畔雜吟の一

そよげる芦よこゝろあらば
つれなき君の此處にしも
來ませし時にかたれかし
幾年前のつきの夜に
人氣とだへしこの山の
湖のほとりをたゞひとり
泣きつゝ行きし人ありと

● 其二

知るや戀人あしびきの
みやまの奥のおくふかく
人氣どだへしみつらみに
船漕さいで、たゞ一人
かくも烈しく泣くわれを

● 其三

雪をのせたる山のかげ

旗にも似たる雲のかげ
皆來りてずうつるなる
夕のどけきみつらみに

この美しきかけのうち
あはれ浮世のわつらひに
やつれ果てたるわが影も
うつりてある也たえぐに

● 其四

橋のたもとに一目見し
 をとめをけふも人見んと
 わが訪ひ來れど影なくて
 向ひはるく打わたす
 このみづらみの水の上に
 うつるはあはれ星ひとつ

春のつかひ

また風さむきやま路を
 こえて行くなる少女子の

かざしににはふ岩つゝし
 いづくの里に折りて來し
 ふもとの里のはるの日に
 早くも咲ける花のいろを
 見捨てがたくて少女子は
 折りてかざして來しならん
 あはれやさしき少女子と
 とほくもわれは見送りぬ
 みやまの奥にわけてゆく

春のつかひのこゝちして

眞清水

ふたりが頬には血汐湧き
 二人かむねには呼吸せまり
 とれる腕はうちふるひ
 見かはす眼には涙みつ
 かくもはけしく戀わたる
 ふたりのさまを人氣なき

みやまの奥の眞清水に
 行きてうつさばいかならん

なてしこ

かくうつくしく咲にほふ
 このなでしこもいつしかは
 必ず萎れはてつべし

たいかく思ひしのみにても
 あはれと思へわれはしも

涙はげしく落つるを身ぞ

人づま

人のつまとぞなれる君
 しばしは聞きねわか言を
 今こそきみにあかすべき
 包みしおのかまごゝろを
 母もどかめぬむかしより
 われは君をはしたひにき

君の外にはわかむねに
 書けるものもあらさりき
 深山の奥にふたりして
 住みたらんにはその時の
 うれしさおはれ如何にそと
 思ひしこともありたりき
 やさしき君を伴ひて
 春の野みちをてふのこと
 遊はゞいかにうれしきと

思ひし事もありたりき

然るをわはれ今いかに

うれしき事も書きはて、

樂しき事もつき果て、

墓とはなりぬおのが世は

君は知れるかわがこゝろ

かく迄したひ慕ひたる

おのが心をきみ知るか

人のつまとぞなれるきみ

人間はゞ

なれがうれひは世の中に

汚れし事のおほきより

起りたるかど人間はゞ

否とこたへんこゑたかく

汝がうれひはおのが身の

世に容れられぬ恨より

起りたるかど人間はゞ

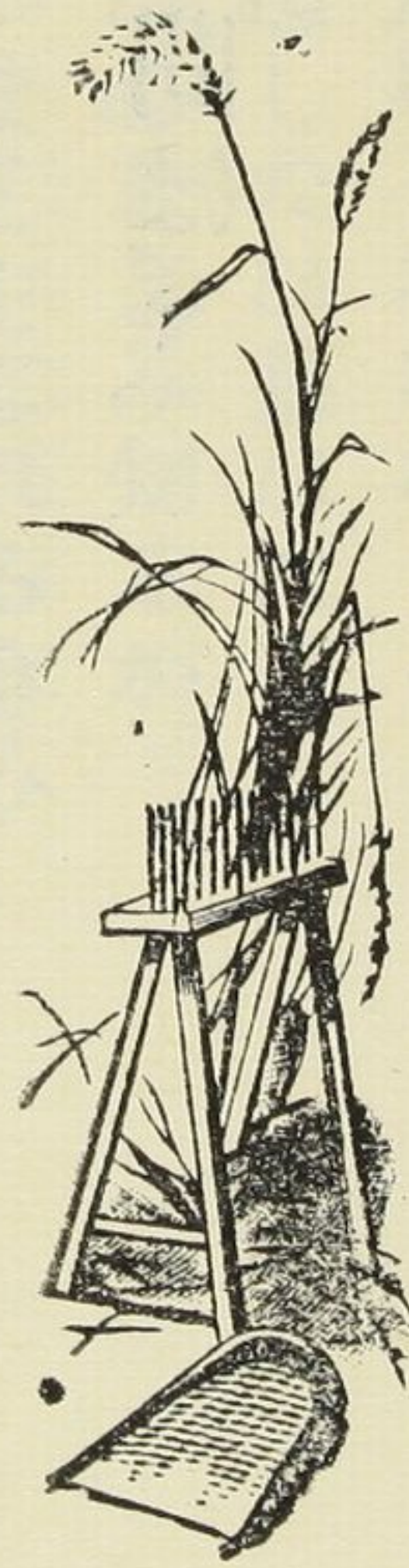
否とこたへんこゑ高く

汝がうれひは戀といふ

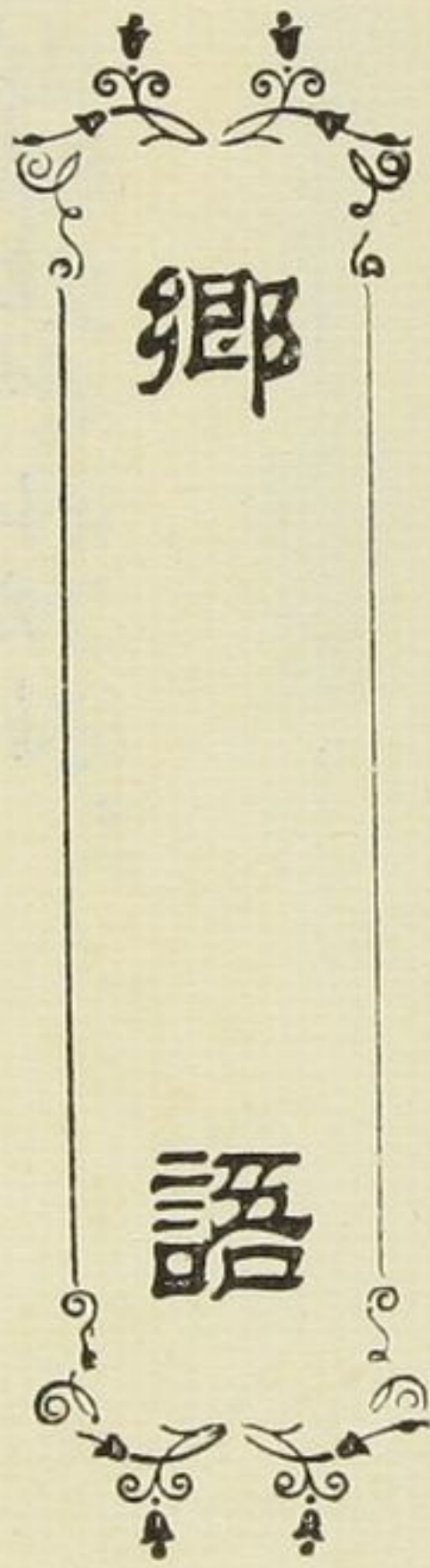
うれしき夢を見たるより

起りたるかと人間はい

いかにかわれは答ふべき



湖 處 子



坊や、坊や、

坊や、坊や、

何を見て躍る。

障子にさわぐ、

小笹のかけか。

小笹にとまる、
すゝめの影か。

桃さく宿

桃の花さくいなか屋の、
乳母か宿の軒見ゆる。
乳ふさを分けて吞たりし、
幼なき妹は今いかに。

花さく山家

八重山櫻咲きみてる、
麓の里の草のいは。
往きて見ましと生にたる、
中をなかる、岩瀬川。

八重山さくら咲き盈てる、
麓の里の草のいは。
楽しき園はかしこなり、
かしこなりとて行過る。

わが姉上

わが姉上の人しれず、
 隠れて何を縫ひたまふ。
 つね片時も母上の、
 そばを離れぬ人にして。
 わか姉上の人しれず、
 隠れて何を書きたまふ。
 文かくときは其たひに、
 われに言とふ人にして。

機織る音

風にすれあふ篁の、
 中に年ふる草のいほ。
 奥ゆかしくも人妻の、
 うちに機織る音とする。
 竹のはやしの草のいへ、
 内に機織る花嫁子。
 まだ世を恥づる恐び音を、
 をり／＼もらす人知れず。

戀

月の光に松風に、
 日ころ澄せし山人の。
 かのが心も戀ゆるに、
 濁るかあわれ戀ゆるに。

相合傘

相あひ傘で君とわれ、
 忍ひやかにも歩きてむ。
 朧ろに月のうちかすみ、
 ほろ／＼雨もふりいで、
 うら懐かしき春の夜を、
 寝るには惜しき春の夜を。

あひゞき

出て來まし、かわか妹子、
 出て來ましたかわか妹子。
 君まちかねて烏羽玉の、
 闇に思はもにたれど。
 君か顔見る嬉しさに、
 搔消す如く消にけり。

わか手を握りぬ吾妹子、
 われを抱きぬ吾妹子。

この柔肌をわが胸に、
 推しあてたまへ吾妹子。
 夜ふかき宵の星よりは、
 外に見る目はなきものを。

砧

わかれて來つる妹か家は、
 狭霧のおくになりぬれど。
 擣つやきぬたの其音は、
 月夜さやかに響きたり。

天津少女

その空蟬のから衣、
重ねたまひし時たにも。
われはたち見の恥かしく、
はしき君ぞと思ひてき。

その空蟬のから衣、
ぬきたる君に對ひては。
心もそらにあくかれぬ、
天津少女を見たるかど。

妹脊の別

白妙の、
月にむかへるわき妹子は、
天津少女の天降あもりつくごと。

歸るが君のためならば、
心をおかす歸れ君。
君を留めて泣すより、
残りて一人われ泣かむ。

松原

うき世の外を訪ふ風の、
 しらべも高さ松原や。
 眞砂のうへをゆく水は、
 すき徹りてぞ流れたる。

鳶

墨をこぼせる天雲の、
 やかてあらしと變るべき、

物いと凄き山のをまを、
 のどかに舞へり鳶一つ。

澄める雲井をわか物と、
 羽もうこかす舞ふ鳶の、
 空に消はては翻へり、
 丘の木末にうつり來て、
 たましくもらす一聲の、
 憂世のほかの笛の音を。

別

おさらばさらば率⁵さらば、
 君もまささきくいませかし。
 とはにと契りし手を分けて、
 西と東にわかるども、
 まささきくあらばいつか復、
 逢見る時もありぬべし。
 おさらばさらば率さらば、
 君もまささきく在せかし。

道上

息も苦しき登り坂、
 登れは見ゆる艸のいほ。
 道ゆく人を慰さめて、
 にはふ籬の菊の花。
 思はぬ山に何如許、
 情ある人の住むならむ。

磯山陰

人目の關と峙たてる、
磯山陰に遁れきて、
潮を浴ひる妹と脊は、
いかにとけたる中ならむ。

わか笛

節もつたなきわか笛を、
あはれと君の聽しより、

宵^{よな}く君が門邊にて、
われは吹けりわか笛を。

君か父なるその人に、
今宵つれなく禁^{とめ}られて、
聞くらむ人もなき野へに、
一人來て吹くいたづらに。

思

讀みたる書も懶しと、
机の上になけ打ちて、
蝴蝶戯るゝ野にくれは、
いやまし狂ふわが心。

蝴蝶は匹戯るれと、
我は戀する人をなみ。
春の日中のかげらふの、
もゆるが如きわが思。

思あまりてほろくくと、
涙は袖におつれども。
君は心ものどかにて、
いかでと許り問ふか憂さ。

むすびし髪

學ひの庭の撫子の、
むかし睦みし君とわれ。
振分髪の二たすぢを、
結びて川に流しゝを。

結ひし髪は今もなほ、
 解けぬ儘にてありぬべし。
 断えにし君とわが中の、
 再たひ合はむ時やある。

(註若き男女の髪と結びあはせ、川に流して縁と結ふ習あははいへり。)

むすひし柳

里をいでたつわか夫と、
 復の逢瀬を契りつゝ。
 結ひ置つる川そひの、

柳は解けずなりぬれど。
 心うつりし人にして、
 いかでか我をかへり見む。

織女

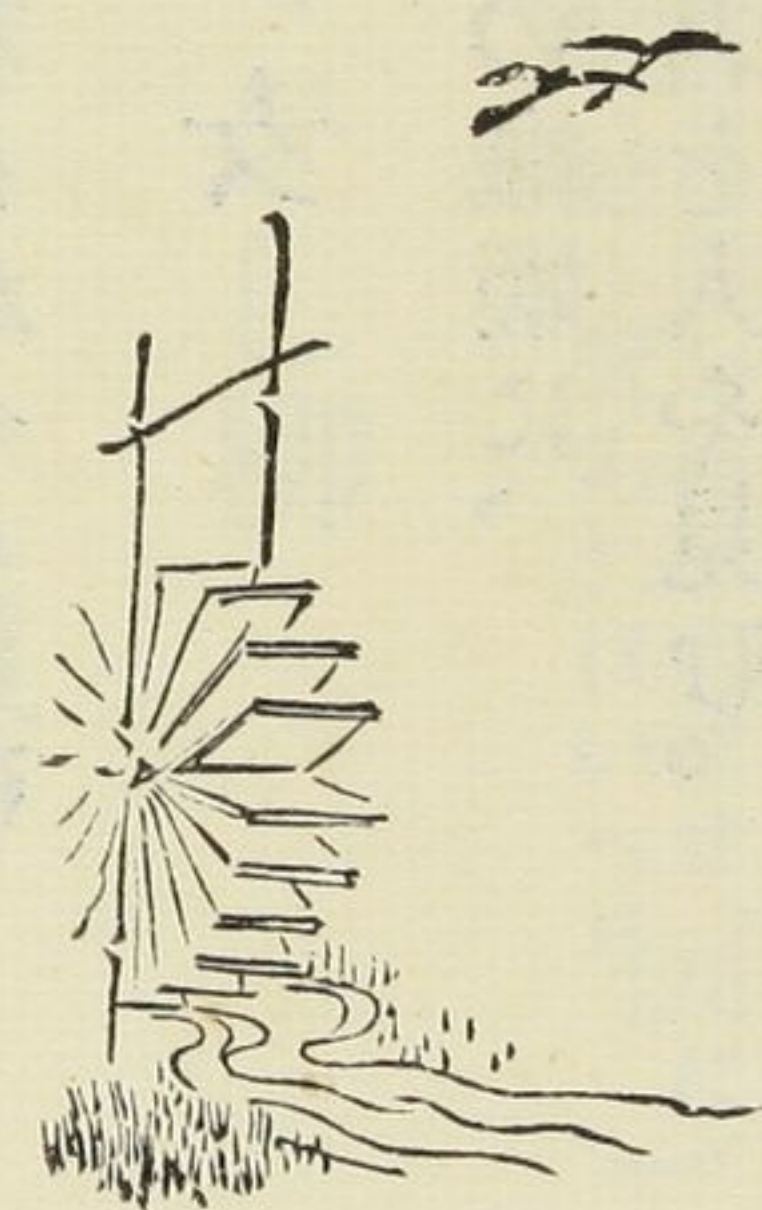
天の河原の織姫に、
 こくふる君を人や見む。
 雪の腕もあらはにて、
 箴^{をさ}うつ姿人や見む。
 心かゝりなわか妹子、
 二階の窓をさせよかし。

雪のあしたも月の夜も、
 えらゆふ花の咲ちりて、
 波のをごとの音きよき、
 彼浦わこそゆかしけれ。

かの松かけ

佐々木信綱

そ
 な
 れ
 松



磯の景色もおもしろし、
 岸の眺めもいひしらず。
 玄かはあれども彼浦の、
 沖の島こそこひしけれ。
 沖の島べはひろけれど、
 南のはてのいはかどに、
 枝さしおほふそなれ松、
 かの松蔭がなつかしき。
 かの松かげはかの人と、
 共に語りしかたなれば。

四つのを琴

藻にすむ虫のわれからと、
 くいのやちたび百ちたび、
 かひなきものゝそのかみを、
 思へば悲し書そらごと。

たへぬ思ひのしばしだに、
 なぐさむやとて折々に、
 四つのを琴は手に取れど、

半の月もみはわかず。

安き眠

あふ事かたきこひ人も、

うれしき夢を結ぶらむ。

ひとやのうちの罪人も、

まばし妻子と語るらむ。

親の名しらぬ孤子も、

なさけの胸にいだかれつ。

おどろへはてし病人も、

野べに山べに遊ぶらむ。

身にまつはれる苦しびも、

なげきも知らでやすらかに、

眠れる人のさま見れば、

まばしの死とやいひてまし。

死といふものゝかくばかり、

安きねぶりにあらむには、

憂世の道をゆかんより、

さめぬふし床が望ましき。

はなれ小島

はなれ小島に家もがな。

おもふ吾妹とたゞ二人、

共にすまむとねがひしは、

あはれ昔のゆめなりき。

はなれ小島に家もがな。

心のかざり朝夕を、

ひとり泣つゝ暮さんと、
願ふも今のゆめなれや。

我身の春

心のはなのそれよりも、
かたちの花のそれよりも、
こがねの花をほりすなる、
うき世の人にすてられて、
さびしき家のまどのべに、
姿やつれし少女あり。

こゝろの花はにはねど、
 かたちのはなはうつろへど、
 こがね花さく家の子が、
 とつぎの夜半にかざるべき
 はなのふり袖ぬひながら、
 我身の春はくれんとす。

老木の椿

家のうしろにさら〜と、
 あゆみすゝむる流あり。
 老木のつばき枝たれて、
 さしおほひたる下かげに、
 おちたる花をあつめつゝ、
 二人の子らは遊ぶなり。
 はなだの糸につらぬきて、
 まろき花輪やつくるらむ。

ひろひし花をつみかさね、
花の山をやきづくらむ。

鶇はかへりてかりは来て、
こゝらの年はすぎにけり。
家に光をみたしつる、
二つの星のかげきにて、
川のおなたの古てらに、
ふたつの墓はきづかれぬ。
かげをうつし、川水は、
よどむ時なく流れつゝ、

老木の椿このはるも、
花さきて又はなづちる。

深夜の都會

煙突^つよりもらす苦しびの、
黒き歎息^ともやみにけり。
走る車が悲しびの、
高ささけびもとだえけり。
うき世の道をゆきかひて、

胸やすからぬ人みなも、
錦のどくにさむしろに、
まばしねぶりを結ぶらむ。

けがれし塵も吹きたゝず、
にこれる風もしづまりて、
むなしき空に三つふたつ、
きらめきわたる星のかげ。

闇　　夜

音せずなりぬ松の風。

きこえずなりぬ鐘の聲。

静かに夜半のふけゆきて、

ねぶりやすらむ天地も。

限もあらずはてもなき、

み空遙にながむれば、

星のはやしは影消えて、

雲のはたても見えわかず。

眺むるまゝに何となく、

さやけくなりぬ吾思ひ。

やみの内より明らけき、

光さしくるこゝちして。

眺むるまゝにいつとなく、

すみわたりけりわが心。

かなたの空にまさしくも、

神いませりと思はれて。

今のはの詩人

かれのめぐりにかゝやきし、

望のみひかりきほうせて、

かれの生の緒つなぎつる、

なさけの糸もたはてぬ。

かれを苦しめさいなみて、

つれなかりつる此世より、

まだ見ぬ國にさそふべき、

使は窓にせまり來ぬ。

うすれもてゆく夕日かげ、
聲なき室むらをてらしつゝ、
をぎのうは風そよくと、
わかれの歌をうたふなり。

今はとなりし今もなほ、
ゆめか現かわかねども、
口よりもるゝ言の葉は
いづこの人の名なるらむ。

森の歌

互かたみに上にいでんとて、
争ひたてる高さ木の、
天つ光を身にうけて、
ゑみほこりたる下かげに、
恵にもれて今もかも、
枯れなんどする小草あり。
繁きさはりにさへられて、
人に知られぬ梢あり。

あらしの風をよそにして、
 静にねぶる老木あり。
 あだし梢にやどり木の、
 時得顔にもほふあり。
 われどのぼらん力なみ、
 よそにかゝれるかづらあり。
 去づけき森の草木すら、
 猶憂世にはもれずして。

春のこころ

董の床にはなの枝えに、
 思ふまに／＼遊びつゝ、
 遊びつかれてぬるほどの、
 夢路もいかにやすからむ。

くちなし色にしるたへに、
 そめし羽袖をひるがへし、
 まふや蝴蝶のこゝろこそ、

はるの心とらふべけれ。

昔のいもせ

枝をたれたる松かげに、
 ながるゝ清水むすびつゝ、
 里の子あまたつどふなり。
 まゝとどあそびなさむとて、
 ひこに撰えられしをさな子は、
 兵士のむれに入りにつけり。

よめになりつるをみな子は、
 母とよばるゝ身になりぬ。

老木のかげにゆくりなく、
 昔のいもせあひしとき、
 ながるゝ清水ながめつゝ、
 詞もなくてわかれけり。

思ひいづれば

いまどのちどの世にありて、
 すぎにしかたのなかりせば、
 いかにかゝるのやすからむ。
 おもひいづればくるしきに、

かの人に

空ゆく月よわがために、
 こふる心をつたへずや。
 そらとぶ鳥よ我ために、
 たへぬ思ひをつたへずや。

をしき袂をわかち來て、
 月の半も過ぎんとす。
 いかでつげまし此思ひ。

雲井のよそのかの人に、

名もなき小川

ひろきそらをもうかべつゝ、
 遊ぶ子らをもうつしつゝ、
 きしのすみれもひたしつゝ、
 さびしき村の片すみを、
 名もなき小川朝にけに、
 海へ海へとながるなり。
 ながれいともほそけれど、

道のまに／＼さからはず。
 きたしき波の打つれて、
 さゝやきながらあゆみゆく。
 わはれ其名も知られざる、
 いくその小川あつまりて、
 さかひも見はずはてもなき、
 千ひろの海をつくるらむ。

偶　　感

日かげくもれる道のべに、
 飛ぶやつばのの聲きけば。
 みにくき^{ましち}沐猴かうぶりし、
 みめよき^{きつ}狐は市にみつ。
 かたらふ口はどざされぬ。
 とる筆だにもまゝならず。

夜風つめたき小山田に、

なくや蛙のこゑきけば。
 玉のうてなにみづからの、
 たのしびつくす人あれど、
 雨もる軒にたはずみて、
 うゑになく子はかへりみず。

どけゆく水

やくるちまたによぶ聲も、
 あつさにはそる氷うり、
 かふ人なくていたづらに、

とけゆく水や汝ながいのち。

たが言づて

君のおどづれまぢわびて、
みあぐる空を雁かりがゆく。
たが言づてをつたへんと、
たが方にしもいそぐらむ。

かへりしあと

少女がつみし花束に。
もれしつらさやかこつらむ。
かへりしあとの芝原に、
なみだぐみたる花すみれ。

思ひあまりて

思ひあまりてはるくど、
 みわぐる空をゆく雁の、
 みだれがちなる玉づさは、
 たがいそぎたるつかひずも。

まこと

まよへるひとのこゝろもて、
 さぐるまことのことわりは、
 さどりがたしとさどるこそ、
 たゞわづかなるまことなれ。

ひろき此世

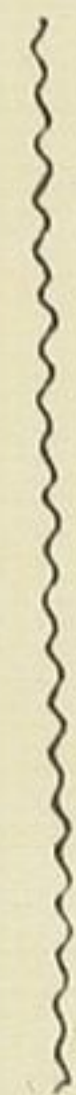
ほしのみ空にかゝやけり。
 水は千さどにながるなり。
 ひろき此世をこゝろから、
 せばしと人のおもふらむ。

なかりせば

ながめさびしき冬の野に、
 残るなでしこなかりせば。
 ものすさまじき人の世に、
 戀てふものゝなかりせば。

すみれの床

玉のきざはし何かせむ。
 錦のとぼりなにかせむ。
 すみれの床の楽しさは、
 おもふ少女とたい二人。



老たる渡守の歌

さすや小舟のみなれざを、
 みなれし人のおほかたは、
 よどみに浮ぶうたかたの、
 さえておどなく成にけり。

おくりむかふと朝ゆふに、
 同じながれをゆき、して、
 いくとしなみをこの川の、

おなじ渡瀬わたせにおくりけむ。

折にふれて

人の君にはあらねども、
人のやつこにわれあらず。
たれかうばはむわが心。
たれにかさげむ此かうべ。

兵士の妻

いとも尊とき君の死を、
なげきなせそと人皆の、
言の葉げにと思へども、
あふるゝ泪いかにせむ。

君のかたみの此わく子、
なげきも知らずほゝゑみて、
ちぶさにすがるいちらしさ。

あはれ此子のなかりせば、

少女のなやみ

はかなき露もわがおもふ、
花にやどりて消ゆといふ。
われはこひしき君の手に、
よりそふ時よいつまでぞ。

死の使

死の使

千種さきみつはな園に、
いざなはむとて来るにか。
日かげもさゝぬ谷かげに、
導かむとて来るにか。

門をいましのたゝく時、
此世の愛も苦も樂も、
皆もろともに消はてゝ、

夢なき眠むすぶなり。

世の憂も苦も樂も、
門さくららぐさ

園生にさけるさくららぐさ、
一つの根にはひともとの、
花よりはかはにははぬを、
千前ちち入のなる園、
たゞ一つなるこゝろに、
たゞ一つなるみさをのみ。
あはれびませや吾おもひ。

蝴蝶

こゝろも知らぬはる風に、
ふきさそはれてはな園の、
いづくの枝にやどるらむ。
すがたやさしきかの蝴蝶、

いづくの枝にやどるらむ

とくきませ

芝生のどこのゆふひばり、
君のためにどうたふらむ。
いろなつかしき花すみれ、
君のためにどにはふらむ。
ひばりの歌のたねぬまに
すみれの花の見ゆるまに、
來ませ吾せことに見む。

日はかたぶきぬとく來ませ。

思ひさためて

おもひさだめてひとたびは、
うかぶおもひも打けして、
みづからわれをさいなめど、
戀にはよわきこゝろかな。

春 風

かたき氷もどけそめぬ。
つもりし雪もむらぎえぬ。
ゆるくふくなるはる風の、
力なきこそちからなれ。



仙 堂 曉 夢

愚仙堂主人

嘯 大 空

裂けよ、碎けよ、天よ地。
など裂けざるか、碎けざる。
爾そのまゝにある限り、
世はとこやみの荒野なり。

爾碎けずはいつまでも、

天の佳人は出でざらむ。

裂けなむ時よ、心して、

照らせ輝け、月よ、日よ。

その名

君もあはれと思ひなば、

またどその名を言ふ勿れ。

きけばなまなか恐ばれて、

涙の種となるものを。

代人作

かばかりもの、悲しさに、

人にかたれば冷かに、

き、流すこそもの憂^うけれ。

月も出でなば只ひとり、

更け行く夜半の海の邊に、

ゆきて悲しくなげかばや。

過去の夢

かくも冷えたる世の中に、

わが情感のみもゆるなり。

あな浅まし世と見ては、

いな妻ひかるつかの間も、

そこに雑らむころなし。

富も位ひもなき身には、

世を捨てなむは安けれど、

老いたる父母をいかにせむ。

世にはなさけの柵の、

人の願ひをさまたげぬ。

毀譽褒貶の關を越へ、

命さへこのとりでを打破り、

峯の白雲押しわけて、

眞如の月を探らむか。

迷悟の境ひ道嶮し。

わが戀

はしたなき身と笑はれつ、

なほこりずまに君にしも、

命をかけて戀ふる身は、

悲しかりけり昨日今日。

思ひ餘りし言の葉の、

つもりて山となるまでも

君にさこそむよしもなく、

ひとりさびしく嘆くなり。

なさけも深き君なれば、

いつか我が身のこゝろざし、

のこさずさゝて給へかし、

さらばなやみも晴れやせむ。

われも男の子がいつ迄か、

戀の道のみたどるべき。

君がためとし知るならば、

思ひたつべしこの戀を。

餘る思

何とて君を戀すべき。

我を捨てにし人なれば。

されど何とて捨てられむ、

いとしと見つる君なれば。

愚かの余

處女に君は在せども、

親の定めし夫あれば、

道ならぬ戀と知りながら、

我は君をば戀ふるなり。

昨日は村の人々に、

賢き人と言はれしが、

今日ふみ迷ふ戀の道。

愚かのわれを知るや人。

逸 題

破れ衣をわれの纏へばや、
人はつれなくもてなせり。
とてものことにこの衣を、
ぬぎて捨てんかいか君。

洋犬かめよ

追へども跡を慕ひ來る、

汝が真心はいと深し。

洋犬かめよ、洋犬かめ。

汝が真心を餘處にして、

つれて行かぬはわが情。

これより我は町に行く。

町に出でなば数々の、

大犬小犬を如何にせむ。

洋犬よ、洋犬。

われに心をどいめずに、

疾くく、歸れ爾が家に。

そいろわりきにゆく時は、

汝を野邊いましにともなはむ。

野邊には汝れの敵もなし。

君と我

戀のさ、舟安らけく、

君がこゝろの池水に、

浮べてしより身も魂も、

軽くなりけりこの日頃。

戀ありてこそ君とわれ、

かくも楽しく日を送れ、

戀なき昔いかなりし、

月の影

酒も肴も盡さはて、

巷をとほる人まれに、

閨のともし火影暗し。

水も洩さぬ妹脊中、

楽しく語る睦言を、

誰が羨まぬ者かある。

世を憂さものと嘆ちてき。

二人がなかの悦びは、

二人の外に誰か知る。

今ど歌のんもろどもに、

楽しさものと世の中を。

無心の月と思ひきや、

窓の内より影しのぶ、

羨ましとやおもふらむ。

筑波山

わが戀人よ目をあげて、

眺めても見よつくば山。

いつの世よりか妹脊の、

深さちぎりを結びけむ。

なか睦ましくむかひゐて。

わが戀人よもろともに、

二人が心をあかしつゝ、

彼處へ行きて住はゞや。

千年の雲につゝまれて、

浮世を餘處にやすらけく。

水遊び

「こゝまで来たなら乳飲ましょ。」

水はあえぎて來たりしが、

小供は遠くあとしざり

「こゝまで来たなら乳飲ましょ。」

水は走りて來たりしが、

小供はまたもあとしざり

「こゝまで来たなら乳飲ましょ。」

水は行かむとおもへども、

今はたゆかむ力なし。

聲もろどもに手を舉げて、

小供は「ワー」と叫びしが、

笑ひつゝまた立ち歸り、

「モゝ來れないかおかしらね。」

小供は今日もかくしつゝ、

たのしく水とあそびけり。

わが宿へ

かくもつかれしわが足の、

かるく運ぶはなにゆるぎぞ。

家に歸えらばわが妹の、

笑める姿のあればこそ。

やさしき言ことばあればこそ。

無我境

月冴ゆる夜は風清し。

心ばかりは墨染の、

衣に身をばつゝむわれ。

罪も悩みもあらずして、

鏡のごときわが心。

今の境のまどかさよ。

月や我なる風や我、

心すむなる此の景色。

長くもあらな^り秋の宵。

秋 曉

月は落けり、露深し。

荒野に虫の音も稀に、

旭日の影はうかびけり。

霧たちのぼる山かげに、

草蒔る處女打ちむれて、

うれしき戀を語るなり。

あはれ樂しき世の中は、

秋のあけぼのそれなるか、

空にはかゝる雲もなし。

自 適

情の道の荒みなば、

寂し荒野につゝたちて、

夕日の影を眺めつゝ、

七ひろ岩に身をばかへ、

山嵐、宵時雨、

叩つに任せむ。

吹くに任せむ。

月下逍遙

月は限なく冴ぬにけり。

風は心を吹きすます。

たのしからずやこの夕。

君と我とは手を握りて、

ともに歌をば歌ひつゝ。

足にまかせて辿り行く。

月の雫か、白玉か、

置く露さへに心あり。

たのしからずやこの夕。

心は空に舞ひ入りて、

我はうき世のものならず。

君もうき世の人ならじ、

浮世の塵もといまらず、

心なやます事もなく、

童のごとき身とならぬ。

歌へ歌はむもるともに、

語れ語らむもるともに、

たのしからずやこの夕。

秋の月

月の心の高ければ、

筆もかのごと運ぶらめ。

日暮方よりあやどりし、

山と水との影清く、

蟲も幽かにすだくなり。

秋 夜

寢覺寂しき夜の床、

裳よろほに露の玉置きて、

窓もる月のかげ清く、

照さぬ隈はなきりのを、

くもり勝なるわがこゝろ。

願へる戀のかなひなば、

かゝる折にぞたゞ二人、

遊びありかむ樂しさも、

夢より外に術なきか。

祈れど心やすからず、

破れし垣根に虫ぞ鳴く。

吾心境

過ぎ越し方を忍ぶれば、

愚かに世をば辿りにき。

悲しく日をば送りにき。

さはさりながらこの頃よ、
神のめぐみに身をまかせ、

罪もなやみもあらずして、

日ごと夜ごとの起臥も、

たゞに楽しく感ずなり。

坊 や

坊やは眠むるか眠むるなら、

眠むらぬさきにモ一一度、

歌ふてお聴かせかあちやんに、

さつきのうたをモ一一度。

恥やく坊やは眠むたいか、

歌ひもせずすやくと、

前後も知らず眠むつてさ、

ほんに小供の罪のなさ。

宵の祈り

物ものしづかなる雪ゆきの宵よる、

神かみのみ前まへにぬかづきて、

悲^{かな}しき限^{かぎ}りきこゆれば、
 罪も悩みも消え失せて、
 心たのしくなりにけり。
 この樂みをいつまでも、
 つゞけてはしやわが願。

君は誰れ

君に思をこがせども、
 迷ひの霧をおひ拂ふ、
 力なきこそ恨みなれ。

君を初めて見てしより、
 日に増しぬる、戀ひ衣、
 落つる涙の繁げくして。
 君は何處の誰れならむ、
 只面かけを見たるのみ、
 家居も夫と知らずして。
 君を初めて見そめしは、
 實に彼處なり彼處へと、

幾度行きて見つれども。

君に逢はむと幾たびか、
神に祈れどかひなきは、
ほかにも祈る人やある。

程経て後の夜なりけり、
君は夢にもきませしが、
語る間もなく消ましぬ。

そのあくる朝思ひにき、

きみも心のあるならむ、
夢にも來ます程なれば。

されば何とていま一度、
彼處へとては來給はぬ、
余行くとは知りますに。

かばかり君に迷ふわれ、
かばかり君を戀ふる也。
ゆめにも君は知ざるか、

情知る人の世に在らば、
いつしか見たる其折を、
なほ忘れずや尋ねてよ。

忍ぶ戀

海山こそは越えねども、
人目の關を避けて來る、
ひとの心やいかならむ。

軒端にそよぐ風にさへ、

人や知らんと怪あやぶみて、
やすき心もあらじかし。

心をこめてかたらへど、
らわの空にて聴き流す、
君がこゝろぞ測られず。

恨むといふにあらね共、
きみが心の冷えたるは、
かへすくも悲しけれ。

君しあらずば世の中に、
 とみも位もなにかせん、
 君ありてこそ樂しけれ、
 君許さずば止むを得じ、
 君が父母いふねにせまりても、
 戀しき君を得てましや。
 かばかり心におもへ共、
 答のなきはなにゆるか、
 我を厭ひておはすらん。

今は何をかつゝむべき、
 君許さずは世を捨てゝ、
 深山のおくに隠れてん。
 とは思へ共なかゝに、
 迷ひの夢の覺めずして、
 いやゝおもひをます許。
 こひの焰よ燃えあがれ、
 天をもしのぐ威勢きはひにて、

冷えにし人を温ためよ

慰 歌

末になりぬと世の中を、

たいにかこちて在らむには、

あたら男子のいのちをも、

吹き消しやせむ夏の風。

世をばなげきて徒らに、

悲しく日をばおくりなば、

たけきの男子をのこの身軀むくろにも、

やまひの神の住みやせむ。

あれ見給ひねともし火の、

風のままにく吹かれつゝ、

おぼつかなげの光にて、

なほ暗の夜を照らすなり。

をさなき姫がふり袖の
 衣のひもにつけるすい
 今朝も園生に音すなり
 出で、や君が遊ぶらむ

かなしき園生

松岡國男

野邊の小草



あはれ昨日はもろ共に
 君とうたひて遊びつる
 人もいまさぬ園の中に
 けふは誰とか遊ぶらん
 一人や君があそぶらん

分 同 同 同

大 野 邊 の 小 草

あこよろたへ

あこよいざとくかの歌を
 あねが教へしかのうたを
 高くうたひてまぎらはせ
 このたへがたき夕やみを
 かき根をめぐる水のねと
 わら家訪ひ來るほしの影
 すぎにし事のかざりなく

思ひ出さるゝ夜なりけり

我がめづる子よ物やらん
かなしき聲をひそめつゝ
姉ぞみ來ずやと問ふな夢
たゞとく歌へかのうたを

わかれ

汀のさゞれなみたちて
かげ亂だれゆくそらの雲

夕日いざよふみづらみに
翡翠のはねもまよふなる

きみがゆびさす西山も
あすは東に遠からむ
わかれんとして立かへり
又見るこゝろ知るや君

君がすすさびの笛竹に
こもりし節や何なりし
かなしき旅路に出でかねて

たゆたふ我に告げたまへ

聞かずかたらぬため息に
 すぎつる宵もありしかど
 別のちかくなりぬれば
 我が血浪だつ今さら

谷の草

われははかなきたにの草
 はてなき空の青ぐもを

何におもひはかけつらむ

我はかなしきたにの水
 ゆくへも知らぬ荒野らに
 何にすみかはもどめけん

春もしづけき岩かげを
 つひのやどりと定めつゝ
 わびても一人あるべきに

何ゆくすえを夢みけん

あはれ其夢もたらせし
 ゆうべの星が恨めしき

磯の清水

千鳥ともよぶたそがれに
 なぎさの宿を立出で、
 いその清水をむすばんと
 松の樹蔭をわけ來れば
 葉ごしに月もほのめきて
 かもわてらしぬ清き子が

湧きて流れて大らみの
 うしほに雑る水よりも
 はかなかるべき行末を
 思ひやりつゝもろ共に
 清水も未だくまぬ間に
 すでに袂をぬらしけり

あなわすられぬ磯清水
 心もなげにながるゝか
 昨日は人にわかれてき

明日はわが身も亦行かん
あはれいつまでこの磯に
ひとりわきては流るらん

逝く水

小舟さをさし出で、來し
きし根の宿のうばら垣
かをりも未だ消えぬまに
川上とほくなりけり

のぼる白帆のひまをなみ
立ちしをどめが衣の色
その面影もまぎれゆきて
ゆふべは浪のおどかなし
とても流るゝ身なりけり
大河水にまかせても
海にや出でんちりの世の
うきを沈むるおほ海に
雲なる沖をさまよはし

さわるうき世もなかるべし
 千ひろの底をもとめなば
 しづけき里もあるならん

いで白波に身をかへて
 あるは磯邊にしたひより
 あるは汐路をあくがれて
 我が世うたはん聲高く

ある時

まつかぜさむき山かげの
 をざゝがくれの墓をのみ
 何にもとめてなげさけん

すみれ咲くなる春の野も
 ひばりさゑづる大ぢらも
 いづれかいもが墓ならぬ

いづれか妹がはかならぬ
まどふなこゝろ今さらに
いづこかは我が墓ならぬ

○

戀て男子の死ぬといは
乙女やいかに紀どろかん
夜すがら歌はうたふとも
聽ずば甲斐もなかるべし
唯よそながららつげたまへ

我名ばかりをそれとなく
さらば思ひや出だすらん
われもその夜は夢に見ん
あかつきがたに夢に見て
まどふ心ずかざりなき
見しやまことの我なりし
つらきが今のわが身かも

園にさえづる百千鳥
樹だちにそよぐ朝風も

君が名よばへもろ聲に
わがこの夢の覺るまで

夕づく

かのたそがれの國にこそ
こひしき皆はいますなれ
うしと此世を見るならば
我をいざなへゆふづよ
やつれはてたる孤兒を

あはれむ母がことの葉を
しづけき空より通ひ來て
われにつたへよ夕かぜよ

うたかた

身をうたかたの今さらに
もとの浪こそこひしけれ
君がたもとにすくはれて
つゆと結びし日ぞつらさ

あゝ露の身を如何にせん
 かへりみるまへ仇し世に
 我がうれひをば語るべき
 人やはありしきみならで
 墓をへだてゝとこしへに
 戀ひわたるべき身の程と
 いづれの神かさだめけん
 なぐさめがたき此世かな

夕やみ

君がいませしひさかたは
 いかにのどけき國なれば
 さしもみだれし玉の緒の
 みだれも今はたねぬらむ
 一人うき身をまどへとて
 のこしたまひし人の世に
 みそらは高くとほざかり

たよりもなしやと言葉にことのは

されどむかしの夕ぐれを
はなどをごとのふる里を
おもひたまは、白たまの
なみだもなごか無るべき

ゆふべの空にかくれつゝ
消に行く雲のかげばかり
ちりの世人よびとに見せたまへ
君がころものしろたへを

春の夜

をぎつねきつね春の夜を
せめてはなくな故さとの
わら家の鳩がたまさかに
むかしの我を思ひ出で、
夢に見にこんおぼる夜を

川の岸に立て

水のながれのいかなれば
 かくも今宵は身にしむか
 世にもかなしき悲しみを
 見ん日の近くなればにか
 戀ひする人はとほく去り
 さびしき岸にたち出で、
 一人をとめがさくならん

其日のあすどあればにか

野の家

あしびきの山のあらゝぎ、
 たゞ一もと摘みてもて来て
 我妹子がたもとに入れし
 あしびきのやまの蘭
 いまもなほさやかに匂ふ、
 あなうれし我をばいまだ
 忘れたまはじ、

○

わが戀やむはいつならむ、
 雨よりしげき涙もて
 君がたもとをぬらしつゝ、
 いはぬ四年の苦しさを
 唯ひと度にうちわけて
 あはれと君も泣かんとさ、
 我が戀やむは何時ならむ、
 いのちをかけてわが惡む
 かたきよ、君をいざなひて

あなたの國に行くを見て
 今はとひとりしづかに
 をぐらき淵に入らむ時、

わが戀やむはいつならむ、
 泣きて入りにしわが墓に
 春はすみれの花咲かば
 みち行く君がおのづから
 摘みてかざへむ其日こそ
 陰なる我はまた泣かめ、

○

君が門邊をさまよふは、
 ちまたの塵を吹きたつる、
 嵐のみやとおぼすらむ。
 其あらしよりいやわれに、
 その塵よりも亂れたる、
 戀のかばねをあかつきの、
 やみは深くもつゝめるを、
 きみが垣根の草の葉に、
 おきてはかなく朝露に、
 力なき我が夜もすがら、

泣きしなみだもまじれりと、
 たれかは知らん神ならで。
 とてもはかなき戀なれば、
 月も日も無き闇の中を、
 なきては歸り來ては泣き、
 我が世は盡さむかくながら。
 せめては夢に入れよかし、
 我はかくともつゆ知らぬ、
 君がしづけきゆめの中に、
 いまの姿をさながらに、

入りてまみえて語らんと、
 あゝいく度か祈りけむ。
 おぼつかなくも我が願、
 成りきや否やたづぬるに、
 由なき身をば如何にせむ。

友よいざ

友よたび人よ、

いざ思ひ立たん。

鶴がかへり行く、

をつくばの山に、

いかに夕くれの

たへがたしとて、

都をどめ等に

わが涙は見せじ。

清き女の神の

かげは見えずとも、

其さげたまへる

くさりにすがらば、

たかきけはしき

いはほの上にも、

いさづくことなく
攀ぢのぼり得ん。

いざや出で立たん、

わがたび人よ。

岩根に清水行く

筑波の山に。

其水むすびて、

みやこの塵に。

けがれてにがき

この涙わすれん、

心の花

君が心にはふなる

其草たまへ、あたゝかき

胸のあたりにひそめおきて

ときはの春をたのしまん

みそれ木枯ふきあらび

此世は冬になりぬとも

わが春風はのどかにて

露もおくべし霄ごとに

世にはらもるゝ山住も
人はかれ行くわばらやも
君がこゝろに咲出でし
花だにあらば安からん

君もらき世をいとはずば
みやこの春にたちまじり
我もかざゝんその花を
やがては得てん冠の
桂もさらにかほるま

雨聲鳥語集

花盡く散りて、月傾くこころはやし。不夜城臺絃歌の夜、人間哀樂の情と一片の風雲に託して、獨興放吟、雨聲鳥語集成る。

繁野天來

不夜城

前門の青柳垂れて
筑波低く、

後門にうぐひす飛んで

富士近し、

幾里の墨堤

風明うして、

月や吞まむ、

花の雲吐く

五層樓。

鳥啼花落

宮城野に

大根畠をみむよりは、

鳥啼き、花落ちて、

よし原に

た、ぼ、摘まん

春もがな。

子規

面白や、

涙ながらにた、面白や、

傾城に

抱かれて聞くや、

ほとゝぎす。

稻妻や

短夜の寢覺が惜しき
手まくらに、

稻妻や、

君が寢顔の美しき。

花の旅立

君とはじめて相見しは、

花笑みそむる夜なりけり、

君と別れしその夜より、

月の眉さへくもりつゝ。

くもるは月の變にして、

笑ふよ花のつねながら、

つねにもがもの浮雲や、

雨ふる袖をいかにせむ。

袖ひく荆棘のはりにだも、

露のなさはあはるものを、

つれなかりける誰れゆゑに

むすほゝれにし黒髪ぞ。

其黒髪の長き夜を、

いばらが蔭に明しては、

明くるうれしき中空に、

物やおもふと里すゝめ。

飛びたつ鳥の羽根あらば、

君が朝寝あさいのふどころに、

そとあたゝかき夢の間も

添ねはむと願ねごし里の神。

佛となりし父母を、

花にも月にもおもひ出の

恨みはつきぬ鐘の音に、

仇しまくらを數へつゝ。

それ今更に數ふるも、

女でゝるの未練ぞと、

しかいふ君がたもとより、

こぼるゝものや何ならむ。

わが口馴れし紅筆に、

いざ其露をかみしめて、

かの無慈悲なる父御前に、

よし無残なる母御前に。

父御母御の無残なる、

戀ばかりには無残なる
それよお七がむかしより、

幾代かはらぬ親でゝる。

見やれ、鈴がの森蔭に、

風よ小雨のそぼふるも、

残るかおもひなほ燃えて、

身を焼く虫の影絶えず。

花にもあかき乙女氣を、

月にも暗し親でゝる、

月にもあかき女氣を、
花にも暗し人ごゝろ。

月と花とのいざよひに、

吹くや嵐の聲すこく、

花と月とのまつよひに、

降るや時雨の音たてゝ。

憂きふしえげき川竹の

契り短きふしの間、

浮き名たつ田の散紅葉、

仇し人にや手折られむ。

仇しまくらのかずくを、

花に埋めむいざゝらば、

仇しなさけの露しづく、

月に消してむいざゝらば。

今宵もあけの鐘近く、

幾きぬぐの袂より

降るや時雨の音たてゝ、

嵐もすこく吹かば吹け。

花こそどくどく散りはてし、

そゝろに急ぐ雲はやく、

月もいるさの山かげに、

人やまつらむほどゝぎす、

生きて人目の關守が

寐覺の窓をなきすてゝ、

死出や三途の川の瀬に、

浮き名のあとをすゝぎてむ。

死出の山路よけはしくも、

三途の川よ遙けくも、

其夜の月を笠にして、

其夜の花をつゑにして。

禿

鉢の木のつばみ數へて、

月影にたゝずむ子あり。

名を問へばすだれの蔭に、

双蝶の袖をかざして。
手をとれば屏風の蔭に、

鴛鴦の裾をさばさて。

小櫻のつぼみ數へて、

月影に頬笑む子あり。

白雲來

君見ずや、

五層樓臺、

哀雁去つて白雲來る。

白雲一片、

双影輕し、月宮近し。

人間哀樂

微塵に似たり、枯葉に似たり。

落葉塵裡、

紅淚所詮草露に如かず。

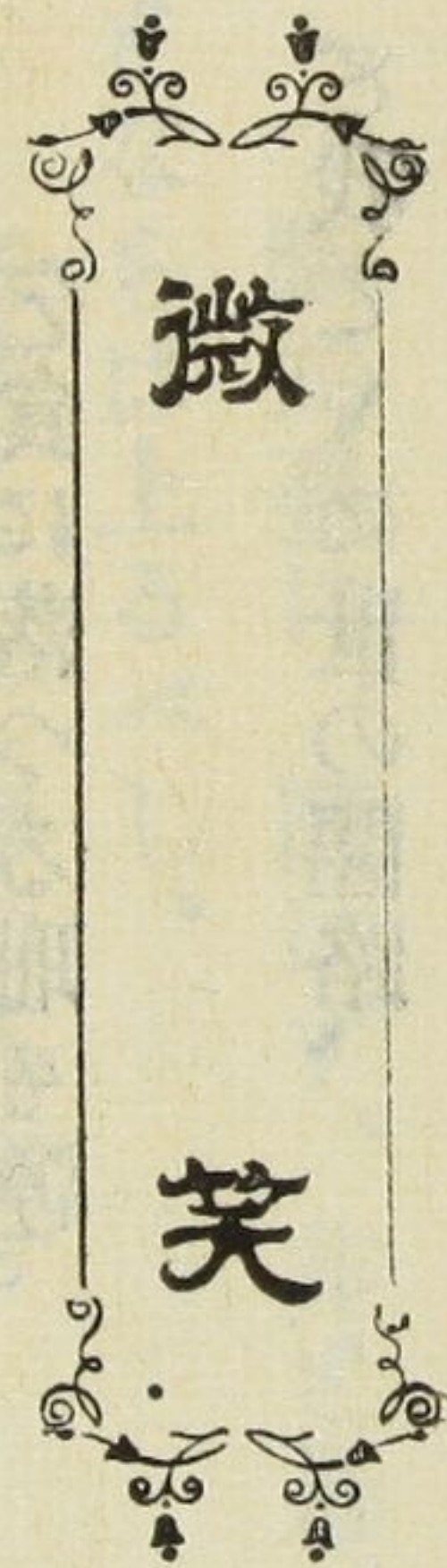
腹かつさばさ死せと言ふ。

我は得死なじ、逼るとも。

頭を觸れて、大磐石、

碎けて死せよ。せじ、それも。

正岡子規



君見ずや、
 明月樓臺、
 天風颯々白雲來る。

沈め、水に。縊れ、木に。

鐵砲吾を打つ眉根。

よし、苦を言はい、藥あり、

暖き夢、寒き骨。

否。我死なむ。ながらへて

世に卑怯どろ笑はれん。

暗き人屋に、苦にも堪へ、

乞食に落つる耻も運。

されど我こゝに世の闇路、

斷頭臺に、問はず、非と是、

上れとならば上るべし、

悠然として春の風。

白刃頭に擬す刹那、

泣かじ、め、しく、怒氣面に、

慷慨罵言せじ。さはれさは

枯木ならんや、しかすがに。

ともし火將に消えんとし、

又くわつと照る、物の情、

再び歸らぬ身のかたみ、

此世に残す、只微笑。

只微笑、いかで靜心。

たくみ出ださん此一事、

集まり來る妄想を

排す可く要す、二十四時。

死と定まりぬ。翌の今、

朝日に草の露と消えば、

百事、萬事、望み、あゝ、

一生の事業、今生。

あらゆる夢の我を攻む、

過去の追想四十年。

戦ひ必ず起るべく、

未來を隠す地平線。

あわや倒れん、其儘に。

頭腦煮え、燄胸を焼く。

苦し、狂亂の我思ひ、

毛髮豎つて、皆裂く。

やがて静まる、うつらく、

知らず、時過ぎ、時来る。

足冷え、手冷え、寒き肌、

再び我に返る夜。

夜しんく、灯かすかなり。

淋しく青き月の色、

汝は翌照らん、我無しに。

行くや、我汝を見ぬ處。

露も残らじ、世に未練、

萬物我に負く今。

王位珍寶何かあらん。

別れかねたりや、いとし妻。

可憐なる女、いとし妻、

哀れ翌よりの新やもめ。

さりとも逢はん、たまくは、

つめたき汝が閨の夢。

死なば共に、と契りしは

昔ある夜のさゝめ言、

我死にし後に氣を病むな、

風引くな、とは憂き誠。

坊よ。汝が欲しき物を言へ。

人形か、畫か、造り花。

てうちく、さこそ上手なれ、

むつかりて母を惱ますな。

犠牲となりて、父は世に

殺されし事をな忘れそ。

父の子ならば、死を誓ひ、

名を現せよ、家の父祖。

我友よ。我復言はず。

天下の事は汝在り。

思へば昨日になりける、

梅の遠乗、小鳥狩。

來れ、忠僕、來れ、下婢。

接吻せずや、近く來て。

「じやき」も來よ、こゝへ。吠えよ、「じやき」。

最後の別れ、與へよ、手。

讀みさし、書に栞せよ。

書齋の壁に捲くな、地圖。

我亡き後も、朝を夕を、

盆栽の花にそゝげ、水。

只一つ残る星と共に、

幻消ゆる妻や子や。

思ふ事無しと、鴉鳴き、

晨朝の鐘鳴る人屋。

夜は明けにけり。旭きら／＼、

我に新しき生命を

與ふべき清き光かな。

死の時到来、安き顔。

一分動く、命一分。

悔無し、心、水の如く。

一秒逼る、死一瞬。

洋々として樂を聞く。

悪を爲さず。豈天帝を

恐ると言はん。作善慈悲、

佛に媚ぶるならじ、もど。

死も頼みあり、生亦非。

神を祈らず、我嘗て。

我を救はん、神いかで。

釋迦に歸依せず。釋迦我を

導かんや、西、淨土迄。

斷頭臺、三丈の空、

見えず十字架、下りず耶蘇。

はとけ既に無し、況んや魔、

紫雲來迎あらばこそ。

獨立獨歩、他に待たず。

金石透す志。

主義のため今我斃る。

日月かゝやき天青し。

我、人に愧ぢず、我、我に。

生前の霜、死後の春。

大丈夫、あゝ、餘榮あり。
我知らず、微笑こゝに成る。

古白の墓に詣づ

(上)

何故汝は 世を捨てし。

浮世は汝を 捨てざるに、

我等は汝を 捨てざるに、

汝は我をぞ 見捨てにし。

浮世は汝に 負さしど、

汝一人こそ 思ひけめ、

汝に負さし ことをゆめ

知らず、浮世も 我も人。

浮世は廣し、汝一人

いづこのはてに 住みしども、

あらゆる人も 我も世も

それを答むべき、誰一人。

億萬人を容るるべき

浮世は、古白 てふ汝が、

大文學者 てふ汝が、

住むとはいかで 知り得べき。

自ら許す 文學者

古白を人は さは言はず。

人正しきか。あらず、あらず。

あらず。古白は 文學者。

汝は詩人と 生れ來て、

詩人たらんと せしが、且つ

途半ばにて ためらひつ、

ひとり自ら。かへり見て。

塵の浮世を 汝はさは

買ひかぶりしよ。價無き

浮世と知らず 頼みにき。

さてや、失望 せり、汝は。

汝が望みし 如く、若し

浮世が汝を 知らばとて、

小詩人てふ 汝にして、
古白てふ名に あらずかし。

意地わるき世は 望ある

若き詩人を 妬むなり。

汝は生れし 詩人なり、

故に汝をぞ 妬むなる

古白てふ名は 知られず、

汝は浮世を 捨て去りぬ。

今や浮世は 唾しぬ、

小き汝の おくつきに。

(下)

汝は何故 身を捨てし。

惜まるべき 身ならねば、

自ら惜む 身ならねば

とて捨てにし。あら悲し。

捨つるべき身を さのふ迄

生きながらへし、何故に。

身を捨てんとは とにかくに

思はざりけん、きのふ迄。

ある夜の夢に、美しき

人に逢ひけん。其人と

何かたらしひし、夢の跡。

うつゝやなごり、雲五色。

雲の上なる、あて人を

塵の浮世に、求めしは

いたづらなりき。月の夜半、

朧に見えし、花の顔。

此世に無しと、聞けば、など

此世慕はん。あはれ彼

月に住むとし、聞かば、吾

月にかけらん、羽は無けど。

心定めし、其刹那、

やさしき人の、情ありて

押しと、いめなば、世に斯くて

ながらへざらん。うたて、あな。

身を捨てし後、汝がため

熱き涙の 一雫

誰こぼしなば、あぢきなく

捨てし身をこそ 喜ばめ。

あらいたましや。天さかる

四國のはての 荒寺を

つひの住家と、亡き骸を

母のそばにぞ 埋めける。

人も詣でず、草生ひつ、

嘲る如き 秋の風

荒るるが中に、浮世如是

二尺の墳墓 只一つ。

つひに隠るる 母の袖、

浮世は汝を 捨つるとも、

汝は浮世を 捨つるとも、

汝を捨つべき、母いかで。

病の窓

心地例ならず打ち臥して

はや二十日にもなりにけり。

ややおこたりし昨日今日、

書繙きて見んとすれど

讀むにものうし筆取りて

物書かんとすれど力なし。

枕に寄りてうつらうつら

南の窓を見てあれば、

嵐まじりにしぐれたる

ゆふべの雨の音絶えて、

障子まばゆく照りわたす

小春の日ぞし暖かし。

庭に立てたる物干の

堅なる影と、其またに

かけ渡したる竹竿の

横なる影と打ち違ひ

半ばを寫す、其はしに

小さく黒く見えたるは

干したる足袋の影ならん。

兎角する程にすいすいと

蜻蛉一つ飛び出でぬ。

左にかけり右に行き

終に戻りて竹竿の

上にとまりて、こくこくと

首を動かす影しるし。

ふと飛び上り消に失せて

足袋のほとりに現れつ、

再びとまる竿の上に

落ちつきかねて、又しばし

あちらこちらとかけ廻り、

障子の外に去りにけり。

待てど来らず。さては彼

獨り遊びの淋しさに、

昨日の友を尋ねつつ

いづち行きけん、やがて又

歸り來べしと待つ程に、

あらぬ物こそ寫りたれ。

何かあらんと見つつ居れば、

影明かに縮まりて

窓にとまるは胡蝶なり

廣き翅をゆるゆると

絶えず動かす其たびに、

わづかに隔つ紙一重、

茶色ぞ透きてうつくしき。

疲れはてけん、暫くは

羽をやすめて飛びも得ず、

漸くここに取りつきて、

ほつと息つく如くなり。

「あはれよ、汝は如何にして

今迄は生きながらへし。

焔を降らす炎天に

焼けても失せず、凄じき

秋の初風野分にも

吹かれて死なず、風の

すさむ中をもくゞりぬけ、

いかに長くも此冬を

過ぎぬ命を偷み得て、

枯れし櫻に返り咲く

花四五輪の露の玉、

あしたは霜と凝るぞとも

知らで、一夜を其枝に

春の夢見るはかなさよ。

思へばあはれ、やよ蝶よ。

汝はやもめの蝶ならん。

汝が夫はささかにの

蜘蛛のとりことなりにけん、

汝がやからは牛飼の

童の杖に打たれけん、

取り残されて只獨り

さまよふずうたて、さりながら

ながらへ居れば兎に角に

楽しきふしもありぬべし、

こよひに逼る玉の緒の

絶えんとしては絶えかぬる

今の悲しさ、そもいかに。

試みに思へ。限りある

汝が一生の其中に

とりわけ楽しかりし日は

菜種花咲き麥青く、

風暖かにそよそよと

綾の袂をひるがへし、

霓裳羽衣の曲をなして

汝が狂ひし其時ぞ。

されども汝は今日よりも

更に樂しき明日ありと

明日をぞ待ちし。其明日は

苦しき中に過ぎ行きて、

さきをどくひも、をどくひも、

昨日も、今日もいたづらに

昔の明日の夢の跡、

待ちにし明日は終に來で、

明日なき明日が來りける。

樂しかりしは昨日にて、

明日程うたてき者はなし。

あはれは汝の末路かな、

來年花は開くとも、

汝はまた此世にあらじ。

あはれ」。と獨りつぶやけば、

蝶は靜かに羽を打ちて

「廣き宇宙はものはあれど、

苦み多く樂みの

少きところ、君が住む

人間界の如きは無し。

吾等が受くる樂みは

今の今なり。今を置きて、

思ひ出すべき昨日なく、

推し測るべき明日も無し、

吾等が暮らす生涯は

今と今とのつゞきにて、

樂と樂とのくさりなり。

あはれよ、君よ。人間の

執著多き心もて、

五欲の外の風に乗る

吾等をはかること莫れ

さらば」。と言ひて其影は

窓をはなれて失せにけり。

惘然としてややしばし

我にもあらで物思へば、

一吹き風の音過ぎて

獨り驚く心かな。

と見れば窓の日薄く、

物干の影かたよりて、

刈り残されし一本の

冬枯れ芒ささばかり

二三尺程寫りけり。

又吹き起る風の

来るよと聞けばはらはらと

ふり来る落葉の折折は

障子にさはる音もあり。

蜻蛉歸らず、蝶も來ず、

たまたまに飛ぶ者さへも

影おぼるにて見分たず。

時求むる夕暮の

鳥かしましく啼きたてて、

外面を通るわらんべの

友に別るる聲聞ゆ。

いつの間と無く物干は

左の方に消え行きぬ。

芒の影もなくなりぬ。

見れば右手の下つ方に、

もやもやとして櫛の木の

薄き影こそ寫りたれ。

次第次第に其影は

變化の如き形をなし、

左に上にひろがりつ、

一間半の窓總て

只薄暗くなりけり。

天に懸けたる日の玉の

光を借りて、美の神が
わがつれづれを慰めし

天然界の幻燈は

終りとなりぬ。眼を塞ぎ

我を休めて、知らず知らず

眠らぬ夢に耽り居れば、

眼ぶたを透しひとみ迄

物ぞ來りし。徐ろに

小窓を見れば、薄青き

月の光は一面に

鬼火の如く照せども、

木の葉も落ちず、塵程の

物だに飛ばず、ごうごうと

影なき風の音はげし。

奈翁假面の圖を見る

一たび鞭を加ふれば、

勇士従ふ馬の側、

歐洲千里山震ふ、

蹄の跡は皆墓場。

再び鞭を揚ぐる時、

國平かに草靡き、

木の葉凱歌を奏しつゝ、

萬歳祝ふ風の息。

三たび鞭あげて、嵐絶え、

ここに招けば、唯と答へ、

諸國の帝あらそふて、

皆跪く馬の前。

はかなき浮世、もろき人、
さわれ何事か成らざると、

思ふが儘にふるまひぬ、

成らぬ事無き神のごと。

爲し得る限り爲し終り、

身は囚はれし籠の鳥、

うたてや爾死せし後、

爲し得ずてふ語残りけり。

あわナポレオン瞑す可し、
匹夫に起り身は天子、

爾の前に爾無く、

爾の後に爾無し。

萬里の東、日本國、

百年の後書開く

小學校の童が

英雄談をものすべく、

豊太閤ともろともに

爾の名をば擧ぐるだに、

既に名譽の極みなり。

あはれ英雄世界無二。

燈下を開く其寫眞、

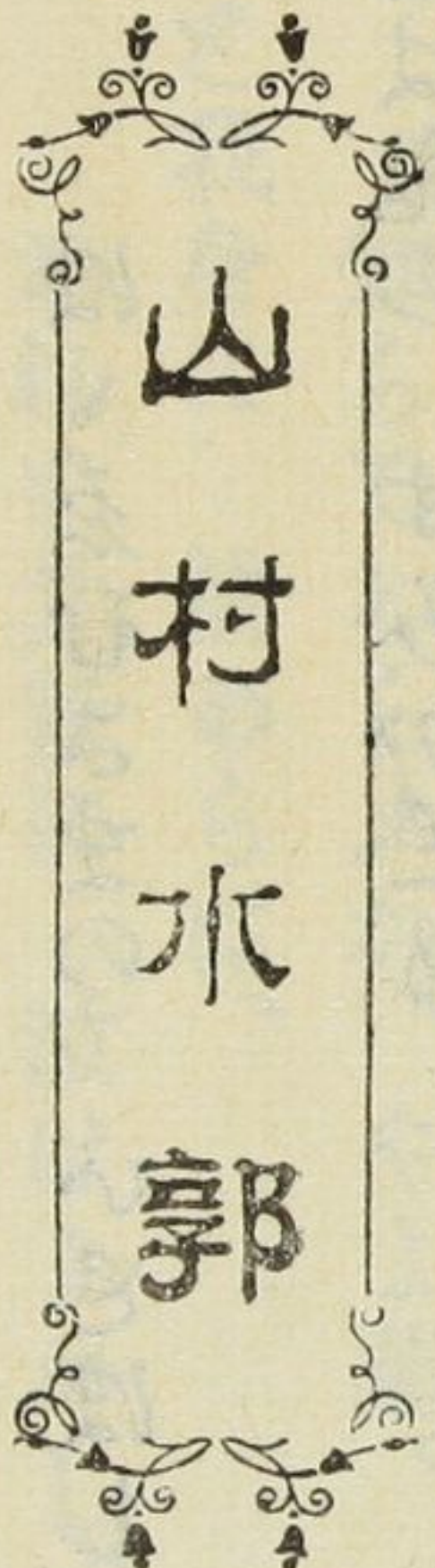
腦も眼も無きナポレオン、

假面に向いてひとり問ふ、

假面答へず、夜漫漫。

今日ばかりの命

大町 桂 月



宵にはのめく いなづまの

闇にさえたる こゝちして、

君とわかれて たえまなく

あやめもわかぬ そでの雨。



どもにあゆみし 庭もせに、

恨にはくや くれなるの

血しほのあとに 生ひいで、

すみれは咲らぬ、うるはしく。

かどは葎に とざゝれて

とふ人もなき 身の上を

なぐさめむとや、花すみれ、

ほゝゑむさまの いとほしや。

浮世は鬼の すみかとも

知らでわらふか、やよ藁。

まこと我身に 情あらば、

われと共音に 泣けよかし。

身はあさかげと なりはて、

明日は絶えなむ、わがいのち。

この世になれど 相見るも、

思へば今日の ひど日ぢや。

はや暮れかゝる 春の日の

ひかりも薄き 庭のみに、

ほの見えそめて おく露は、

わがためそぐ 涙かや。

生きて甲斐ある 身ならねど、

としごろ日ごろ 忍びたる

恨も共に うもるかど

思へば惜しき 命かな。

やよ花すみれ、心あらば、

はかなき戀に 泣きわびて

恨をのみて うづもるゝ

わがしかばねの 上に咲け。

契りし人の 思ひいで、

もしもたづねて 來りなば、

今のごとくに 花さきて、

にほひを送れ、その袖に。

君どあひ見し少女子が、

死ぬるいまはも 君を思ひ

うらみに泣さし なきからの

こゝにとばかり 語れよや。

春 駒

みどりくれなる こそまぜて
 錦と見ゆる 春の野の
 草葉にもゆる かげろふに、
 こゝろは空に うきたてど、
 わはれきづなを 如何にせむ。
 朽ちせよきづな、いざ早く。
 木の下影に 草はみて、
 花にとまらむ こゝろかは。
 見よやかなたの みそらより

駒のたてがみ かいなで、
 吹くものどけき 春風に、
 ひど聲たかく 嘶けば、
 あなや梢の さくら散る。

加藤清正

八道の山よ、いざらば、
 年のなとせ 戈とりて、
 踏みあらしたる 日の本の
 ものゝふは今 歸るなり。

釜山の浦の 秋ふけて

空もしぐる、夕暮に

波路はるかに 帆をあげて、

汝れとは永く 別るなり。

うらみも深き ありなれの

川のながれど もろどもに、

望は逝きぬ、いざらば、

八道の山よ、つゝがなく。

知遇の恩に 身をすて、

四百餘州を わが駒の

ひづめに蹴むと いさみしも、

さめて果敢なき 夢なれや。

我を知りにし 大閤の

世になき後は、たが爲めに、

千里の外に 戈とりて、

異境の山に いくさせむ。

耻をしのびて ふるさとに

歸るものちに 死なむため。
主君の家のゆく末を

思へば重き 命なり。

あはれ大閣 世をさりて、

よつぎの主は いとけなし、

石田小西の 小人ばら

かならず事を あやまらむ。

狐に似たる 家康の

いかでかたゝに もだすへき。

やがて六尺の わがからだ

すて、甲斐ある 時は來む。

わが幼時より はぐ、まれ

めくみをあびし 豊臣の

家をまもりて 死なむ身の

永くは住まじ、世の中に。

跡にみすつる もの、ふの

亡き魂もしも 知るあらば、

三途の川や 六道の

辻にしばらく 我を待て。

これを限りの 見納めに

今ひとたびと 見かへれば、

波音すごく 雨あれて

野山は霧に おぼろなり。

八道の山よ、いざらば、

國のはまれと たゝかひて、

花どちりにし 日の本の

男の子の骨を 守れよや。

はなれ駒

太田 玉茗

はなれ駒

誰が乗捨てし駒ならむ、

春のこゝろにくるひてか、

鬣立て、うらら／＼と

霞める野べにぞ馳來なる。

馳來る駒の眼には

熱き火燄や燃ゆるらむ、

馳來る駒の蹄には

かるき翼や生ふるらむ。

駒は蹄の音たかく

雲雀の床を蹴かへして、

堇の花を蹴ちらして、

瞬くひまに過ぎにけり。

過ぎ行く駒を見かへれば、

かすみに遠く消失せて、

嘶く聲がひさかたの

空のあなたに聞えたる。

花に風

情無きものとは我言はじ、

こゝろのまゝに今宵こそ

吹けよ暴風よ、降れよ雨、

花の命のみじかさも

榮えて老ひて徒らに

散りて塵とはならぬ間に。

雲

空行く雲よ、何故に、

今日はかばかり立さわぐ、

うき世を外の久方の

空にもあらし風や吹く。



自然

濁りはてたる世の中を

捨つるは何か難からむ、

巷の塵を見るよりも

尙捨て易き世なりけり。

世はかく濁りはてたれど

富士の高根は雪しろし、

山より落つる谷川の

水のながれは底きよし。

『自然』は然り、世の中は

などかく濁りはてつらむ、

『自然』の如き世なりせば

世は懐かしき世ならむを。

あゝ世はいつまでも麗しき

『自然』と背き行くべきか。

『時』は叫べり、世の中を

『自然』にかへせ、振返せ。

化粧

まだ世も何も知らぬ兒の

鏡にかほをわはせつゝ、

おのが姿をどうかう見て、

打笑む様ぞあなうたて。

稚きものよ、いつしかも

化粧する業汝は知りし、

姉や教へし、たらちねの

母や教へし、習はせし。

白粉つけて、紅さして、

かざるは何か、稚兒よ。

うき世の人は自からを

誇らむための業なるぞ。

よしさならずも偽りの

世の人々にうれしとて、

見られむための偽りの

こゝろ賤しき業なるぞ。

清き心はかざらずも、

鏡のまへにむかはずも、

穢れじものを、稚兒よ、

誰にならひて然はする。

投げよ、鏡を、鏡臺を、

洗へよ、紅を、おしろいを。

生れしまゝの汝が身こそ

たぐふもの無くたうとけれ。

笑の涙

子を失ひしたらちねの

母はなみだを見せじとや、

君聞き給へ、去年までは

我が子の數のおほくして、

一人呼ぶにも皆の名を

數へあげては我れながら

おかしかりしが、今は唯、

末のひとりの子のみにて

さる事無くぞなりにたる、

おかしからずや君よとて、

笑へる母がその胸の

おもひや哀れいかならむ。

母なき少女

少女が身にはたらちねの

母にましたるもの無きに、

あはれや母に別れたる

少女ごゝろぞいぢらしき。

少女は人の母ありて、

母よと呼ぶを聞くからに、

母なづかしく思ひ出て、

羨やましげに見えにけり。

或日少女は堪へかねて、

人なみ／＼に母よとて、

呼びて見たくは思ひしが、

呼ぶべき母の影も無し。

さりとして人の母を見て、

母とはいかで呼び得べき。

母無きものをさりとしては

又いたづらに呼び得べき。

あはれ少女が朝夕の

ねがひと言ふは母よとて、

一度なりとも聲あげて、

呼びて見たきの外に無し。

人無き折をうかひて、

少女はやをら烏羽たまの
小闇き壁にむかひけり、

母よと呼びてこゑあけて。

あな愛らしき其こゑや、

さやけき、清き、麗しき

少女が眼にはたらちねの

母の笑がほや見えつらむ。



我が戀

君よ、優しき言の葉を

我にむかひて今さらに

かたり給ふな、あはれ君、

君に燃えたる我が戀は

君に消たれて燃え立む

ちからも今は無きものを。

遊 女

うき河竹に沈みたる

君は色さへあせにけり。

あはれや何を頼にて

うかれ男兒を朝夕に

おくり迎へてくらすらむ。

幸なき君よ、うつせみの

うき世の人は君が身の

色こそめづれ、色なくば

ちまたの塵ど一人だに

かへりみる者なかるべし。

うたて憂世に生れ來て、

世のうき波に堪へかねて、

かよりかくよる和田海の

藻よりはか無き君が身の

よるべや哀れいかならむ。

空行く月

空行く月よ、聞き給へ、

世に君ならでたれをかも
友とし得べき、友とせむ

人はひとりも無かりけり。

月よ知りてや在すらむ、

希望に胸はみち／＼て、
その行末の樂しさに

歌ひ／＼しそのかみを。

月よ知りてや在すらむ、

わが戀人とふたりして、
夢見るごとき朧夜の

月に歌ひしそのかみを。

月よ哀れと思へかし、

今は希望も絶えはて、
苦しき胸のやるせ無き

おもひに一人沈むなり。

月よ哀れと思へかし、

苦しき胸のやるせ無き

思ひをわはれ君ならで、

誰にかわれは語り得む。

空行く月よ、希望無き

かひ無き身をば哀れとて、

誰かはわれを慰むる、

誰かはなみだふりそゝぐ。

空行く月よ、さてかくて、

小ぐらき墓に我れ入らば、

唯君一人とこしへに

照し給はむ、あはれとて。

世のさま

子供でゝろが憂世の様か、

泣いて笑ふて、

笑ふて泣いて、

果は泣くやら笑ふやら。

菜かで

あはれ少女よ汝が母は

もと居給ひし母よりも

善しやいかにと人問へば、

否と答へて唯一人

ひろき野原に遊ぶなり、

若菜摘みつゝうたひつゝ。

うたへる歌は少女らが

歌ふ歌なり、さりながら
うたへる聲ぞあはれなる。
おなじ歌をば幾度か

うたひつゝて幾度か

摘みし若菜を籠に入れて。

摘みし若菜は籠に満てど、

満たぬは己がこゝろにて、

歸るやつらき、野へや善き、

いつ来て見ても少女子は

家をよそにて暮るゝまで。

わか菜摘みつゝうたひつゝ。

さるを少女の此ごろは

哀れいかにやしたるらむ。

逢ふ事絶えて無くなりぬ、

昨日も今日も一昨日も

おなじ菜籠はおなじ野の

若菜のうへにのこれども。

~~~~~

### 瀛車の行くへ

稚き子らが心には

瀛車にさほひて勝つとても

負けじものどやおもひけむ、

馳せ来る瀛車の影とめて、

わめき叫びてこゑあげて、

逐ふてぞどもに走り行く。

走るにはやき子供らも



はやき例しの黒がねの

汽車にはいかでさほひ得む、

走りに走り、走れども、

馳せ行く汽車は子供らを

あとに残して過ぎにけり。

あはれ稚き子供らは、

足をどいめてもろ共に

里の野なかにたゞすみぬ。

里の野なかに佇みて、

見えすなるまで怪しげに

汽車の行くへを眺めつゝ。

つれなき君

つれなき君よ、聞き給へ、

寝ても覺めて晝も夜も、

夢にうつゝに戀しきは

やさしき君がおも影ぞ。

うれしき君がここの葉ぞ。

哀れと思へ、懐かしき



戀しき君にまのあたり、

我は逢へども我胸の

戀の火焰は消失せて、

氷見るより尙ほさむし。

つれ無き君よ、一人して、

我が住む故を尋ぬるな、

夢にうつゝに懐かしき

戀しき君に逢ひてすら

かばかり心冷えたるぞ。

## 兵士の母

兵士を送る村人の

旗押立て、群れ居つゝ、

萬々歳と諸ともに

叫べるこゑぞ勇ましき。

老媪は一人つくぐと

出立つ兵士を見送りて、

涙にくもる其眼をば



ぬぐひもあへず佇めり。

哀れ老嫗よいかなれば

泣くぞ老嫗よいかなれば

共に祝ひて大丈夫が

今日の門出をおくらざる。

老嫗は涙おしぬぐひ、

ほみし討たむと大丈夫が

出立つものを我とても

祝はざるにはあらねども。

君聞きたまへ一昨年しはすはじめの

十二月上旬しはすはじめの日なりけり、

人なみくくに嬉しくも

わが子は入りぬ、兵營に。

其兵營に入りしより

こゝろは猛く身は肥へて、

國のかためと自らを

ほこりがほにも許しつへ。



國のかためと我もまた

ゆるしゝものを其の後は、

眉をひそめて練兵の

苦には堪へずと呟やさぬ。

似氣なき事を今更に

言ふもの哉と怪しみて、

説き諭しゝが豫てより

病さざして居たりけむ。

間も無く彼は兵營を

出で、來にけり己が身の

病をなげき悄々と

出で、來にけり、兵營を。

應て病に臥しゝより

しこのえみしの清國を

討ち給はむと天皇の

おは御軍ぞ出でましゝ。

御軍出つと聞きしより

卒かに心地いさみつゝ、



重き病もうちわすれ

起たじとせしは幾度ぞ。

哀れと思へ、平壤の

戦争を聞きて其の數に

あらぬ我か身を我ながら

歎きしことの幾たびぞ。

げにも我子の健氣さよ、

覺めては枕搔きいだき、

寢てはうつへの謔言も

無念くどばかりにて。

不忠不孝の其の罪を

ゆるしたまへと去年の冬、

旅順とやらの落ちし日に

我子は空しくなりにけり。

世に存らへて彼もまた

えみし討たむと諸どもに、

出立つけふの日なりせば

などか祝はであるべきぞ。



老媪は泣きぬ潜然と

泣ける老媪がふもひより、

亡せし其の子の心こそ

哀れならずや、哀れなれ。

其の哀れなる己が子の

こゝろの中を思へばぞ

健氣の母は泣くならむ、

兵士の母は泣くならむ。

### 少女の姿

山また山の其うへに

歌へるこゑの聞ゆなり、

歌へる聲はさながらに

啼く黄鳥のこゝちして。

山を遙かに見あぐれば、

あやふき崖を少女子の

傳ひく／＼て山吹の



花をとりて歌ふなる。

やがてさまよふ白雲に

姿は見えずなりにけり、

歌ふ聲のみ久方の

雲の奥よりきこゆつゝ。

山　　賽の河原

霞める野への菜の花に

戯る、蝶をながめつゝ、

五歳六歳なる少女子ぞ

てふよくと歌ひける。

時に少女は何ぞとか

こゝろにおもひ浮べけむ、

傍への母をかへりみて、

姉はいづこへ行きまし。

呼びて給へや母上よ、

呼びて給へとむづかるを、

母はなだめつ、姉上は、



他へとけふは行きましぬ。

よき兒や嬢は一人して

遊べと言へば、その姉の、

飯らむ日をばいつしかと

たづねて蝶をながめたり。

明日はと母は兎に角に

こたへて流涕おしぬぐひ、

嬢やが姉はうつくしき

賽のかはらへ行きましぬ。

賽の河原へ行きまして

ながるゝ川のみなごはに、

小石ひろひて數とりて

積みて重ねてあそぶらむ。

よき兒や嬢は一人して

今日は遊べよひとりして、

遊べと言へば少女子は

またも胡蝶をながめつゝ。



嬢やが姉の行きましゝ

賽のかはらは姉うへと

嬢やと二人手をとりて

石をひらひし川ならむ。

など姉うへは一人して

賽のかはらへ行きにけむ。

嬢にも告げず一人して

など姉うへは行きにけむ。

河原へ行ききて姉上と

嬢もあそばむ母うへや、

つれて行けよと難<sup>かた</sup>かるを

明日をば待てと宥めつゝ。

胡蝶よ蝶よ菜の花に

とまれや蝶よ菜の花に

とまれと母は聲あげて

嬢やもうたへ、いざ歌へ。

歌へと言へば少女子は

母がうたへる其の歌の



節につれてぢかもしろく  
てふよ／＼どうたふなる。

母でゝろ (俗調)

言ふても聞かせず教へもせいで、  
打つてたゝいてしめしがつか。  
人が打たれりや痛いであるど  
泣くは可愛やあの子のこゝろ。  
あの子打つならさあ此の妾を  
打つてたゝいて下さむせ。

語れ戀人 (ハイ子)

語れ戀人いかなれば

薔薇はかばかり色あせし、

谷間の堇いかなれば  
ちから無げにぞ花咲ける。

あがる雲雀の悲しげに

うたふはあはれ何ゆるぞ。

消ゆるが如くバルサムの



花のにはふは何ゆへぞ。

日は物憂げに悲しげに

寒げになどか照らすらむ

世は何故に小ぐらくて

墓と見るまで荒れにけむ

語れ少女よ誰が爲に

かばかり我れは物おもふ

語れ戀人つれ無くも

なごてか我れを見捨たる。

まなざし (全)

波に夕日の影入りて

うら悲しくも見ゆる時、

海士の伏屋に二人して

物をも言はで坐りにき。

霧立ちのぼり潮満ちて

鷗はあたり飛びめぐる、

折しも君が麗しき



眼には涙ぞあふれたる。

溢れし涙手に落ちて

かよわき君は伏しにけり、

我が口唇は君が手の

あつき涙にうるほひぬ。

今は望も絶はて、

世にある効も無くなりぬ、

あはれ少女が麗しき

其のまなざしや何なりし。

わかれ (全)

八重の汐路に船出して

身を帆ばしらに寄掛けつ、

我故郷よさらはどて

なごり惜めどかひり無き。

年久しくも住馴れし

我家は見えずなりにけり。

我は其方をながむれど



おくらむ人も無かりけり。

めしき涙よ滴るな、

せきとめ難き身なりとて。

裂くるな胸よ悲哀の

溢れむばかりありとても。

すみれ (ゲーテ)

野べの堇のうつくしき

小さき花をたれとても

知る者絶えて無かりしが、

羊かひなる少女子の

嬉しげなるが來りけり、

いとおもしらく歌ひつゝ。

堇はあはれ顔きて、

少時なりとも美しくしき

花のなかなる花たらば、

とりて折られて白妙の

少女が胸にいだかれて、

世には怨も無からまし。



少女はそこに花ありと

知らでや踏て過ぎにけり、

すみれは息も絶えくいに、

少女が爲に消え行くは

我がもとよりの願にて

なごか生命を惜しむべき。

一枝の花 (全)

思ひあまりて唯一人

森の木の間をさまよへば、

いと美しくしき目の如き、

きらめく星を見る如き、

花ひともとぞ咲きわたる。

我は折らむと近寄れば、

花はこゑさへかすかにて、



いと哀れに語りけり、  
折られて懸てしほたれて、

枯れて空しくなるべきか。

我は花をば折りかねつ、

根こそぎ抜て植えかへて、

あらし風にも曝さねば、

思ひまた芽を吹きて花咲きて、

香にこそ匂へうつくしく。

一対の鉢

全

空はみどりに霧はれて、

かのエオラスが囚屋より、

風を放てば波われて、

海士は舟をぞいましむる。

疾く漕げ、來れ、舟人よ、

大波小浪たちまちに

遠く我等を隔つらむ、

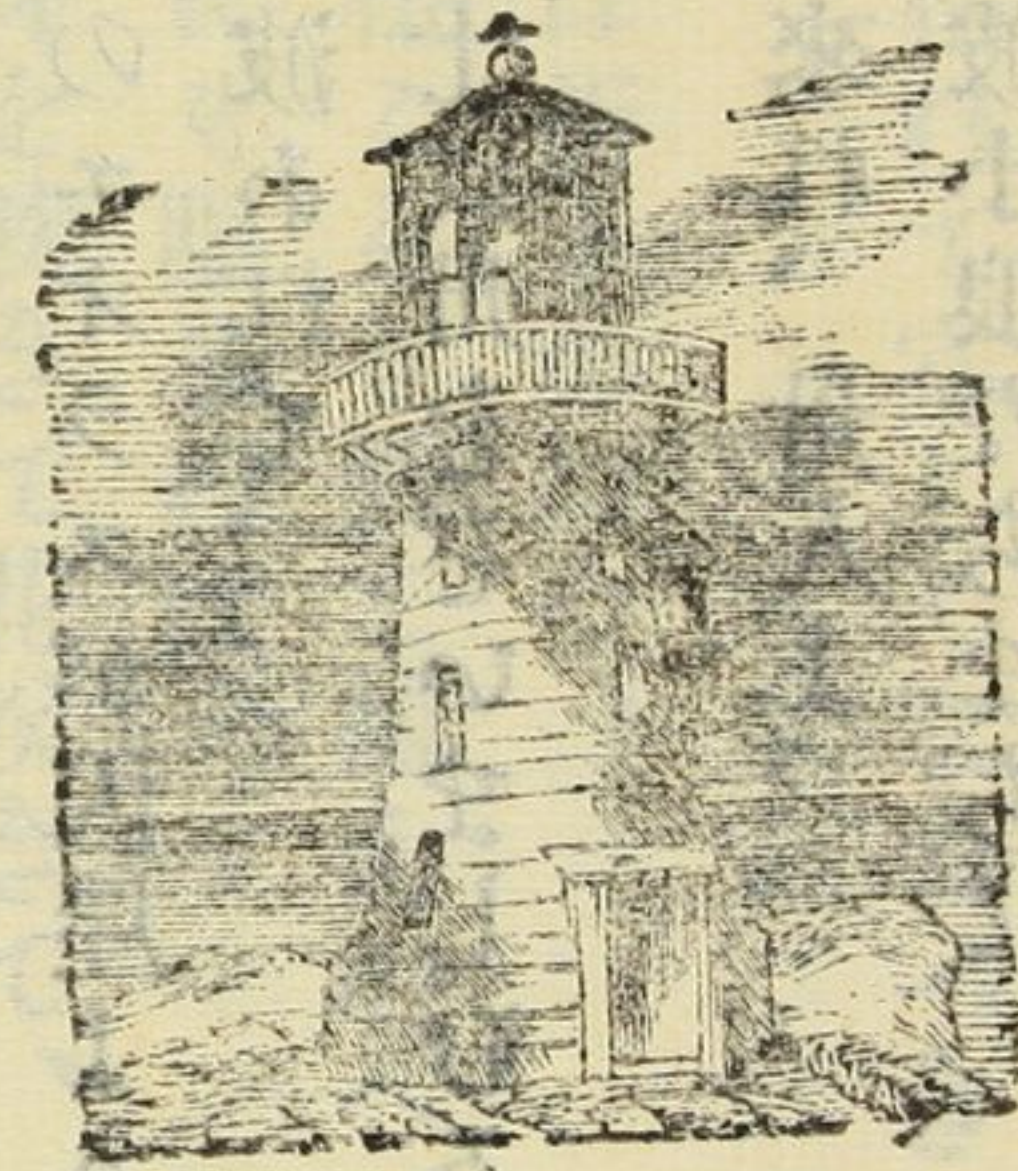
來れ、かなたに陸は見ゆ。



ねむり  
 ひねもすに心なやます  
 うつし世の事業はたし、  
 うすりゆく燈火消えて、  
 音もなきやみの真中に、  
 脊を伸べて、枕を伸べて。

重松朋水

梢の雫



胸れなは  
 大勢小勢  
 来りては  
 去りては  
 空かば  
 快楽



静やかにあふのく胸に、  
 寄せ来る千々の思ひを、  
 かつ／＼に打碎さつゝ、  
 わが心やすまら行けば、  
 物みなも我をわすれて、  
 いつしかと夢に入らし。

重恋眼水

わが涙

何に咽びてわけもなく、  
 落ちんとすらん我が涙。  
 友もなき世の一人たび、  
 心よわくては叶ふまじ。



## 婦人に

あね君忍びたまへかし。

願ふがまゝになにごとも、  
圓かなるべき世ならねば。

姉君しのびたまへかし。

薪のなかもふしどにて、

あればありぬる世のさがは、  
おのがこゝろど苦しくも、

また楽しくも覺ふめり。

冬でもりする山人も、

春の光にあふがごと、

薊あるばらも時來れば、

やさしく花は匂ひなん。

多くはいはじ。人々の、

こゝろくの世の風に、

なびく柳のしだり枝の、

心のどかにおはしませ。



人のこめたる真心も、

神もなかずといふれど、

うらみなげかで御身たゞ、

物に忍びておはしませ。

### 所感

のどかならずやうつし世の、

うきたる願ひ打ちすて、

おもふことなくなれる時。

たのしからずやうつし世の、

苦しき戀をわきらめて、

ものおもひなきこの夕、

獨り酌むなるさかつきの。

その甘酒の底あさく、

すみ行く空の月かげの、

ちりの隅なく晴るゝ時、

のどかならずやわが心、

思ひなづまん方もなく。



## 草のいほ

我が行く方に小路あり。

小路の果ての草のいほ。

よしその路は遠くとも、

せかず撓まず休まずに。

野邊にうばらはほこるとも、

山路に狭霧かくるとも、

なぐさむ友はあらずとも、

せかず撓まず休まずに。

わかき逸りにやみし身の、

其の白川 倒れんまでのつかれ足、

よしその路は遠くとも、

なほも心をいらたずに。

うき世はなれし谷かげに、

自然の光かゝやける、

四時しごたのしき草いほのいほ、

よしそれ迄はつらくとも。



阿蘇の麓

阿蘇の麓に去年の秋、

朽の木かげの草まくら、

一もと見てし女郎花。

其の白川の谷わひに、

今年も去年の露おきて、

やさしく清く咲くらんか。

ありし其かみ恐びては、

わが方ごまに今もなほ、

なびき起きふしあるらんか。

かゝらん露のわびしさに、

手折らで來つる愚かさよ。

心もとなのさよあらし。





## 泉

千草もしばひ夏の日、

野中をたどる旅人よ、

汝が行く路は遠くとも。

しばしはこゝに立寄りて、

休みて行かずや木の蔭に。

いづみのわける木の蔭に。

## あさがほ

かへり來たりしふるさとも、

心にそまで打ちわぶれ。

苦しき思ひに沈みつゝ、

昨日と今日とくらしが。

荒れたる庭のかたすみ、

二葉のまゝのあさがほの。

ふと目にいりし夕は、



ゆきて見ぬ日はなかりけり。

二葉のまののちのちの  
 あまり我身のわびしさに、  
 まぎるゝ術もありやとて、  
 木片をもちてをりくゝに、  
 かげおふ草をぬきとりつ。  
 草はかづくゝとりつれど、  
 照る日のかげの烈しさに、  
 まだらら若きみづぐきの、  
 晝としなればしげみけり。

しげむ姿のかなしさに、  
 あさゆふ足を運びつゝ、  
 其の葉に土にしめくゝと、  
 ひまなく水をあたへけり。  
 あたふ清水にみづくゝと、  
 活きかへりゆく様見れば、  
 樂しみもなきわが身かも。  
 其のおひ先の思はれつ。



こゝろのかげを夢みてし、  
のぞみも消えてわび人の、  
思ひ絶えたるうつし身に。  
名残も何もなければども。

其の東雲のにはふらむ、  
かの花片のしらつゆが、  
身にふりかゝるなぐさめの、  
天のなみだどたのまれて。

## ひとり

今はひとりになりけり。  
のぞみの夢も打ち破れ。  
楽しき戀もなか絶えて、  
今は一人になりけり。

うき世のさがも恨むまじ。  
友のなさけもたのむまじ。  
われは一人であらべし。



やみて疲れてありぬとも。  
 されどなほ  
 われにひとつの光あり。  
 夕のやみにうつし世の、  
 すべてのなやみ忘れつゝ、  
 星のあなたをあふぐ時、  
 むなしき胸に照らし來る、  
 なにと知らねど其の光、

## かくれ井

そのかみの

岡の裾路の往きかひに、  
 しげる叢分け入りて、  
 樂しかりつる我が影を。  
 水鏡みしそのかくれ井。

いにしへの

汲みけん人のあど絶えて、



かげ淋しげの杉の邊に、  
月日も知らで湧きいてし、  
如何になりけん其の隠れ井。

そのかくれ井

今もありつるそのまゝに、  
さびずに水のすむらんか。  
なつくさしげき野の中に、  
人に知られで湧くらんか。

あはれその

かくれ井今はなづかしき。  
塵にまみれし其の後の、  
わがかほばせ水面の、  
鏡に見たしあはれかくれ井。

舟路の旅

誰か舟路のゆふぐれに、  
ひどり眺むる旅の身の、  
悲しからざる者やある。



たゞ一筋にふるさを、  
 忍ぶといふにあらね共、  
 暮行く汐路ながめては、  
 誰か悲しくおもはざる。

### 歸郷

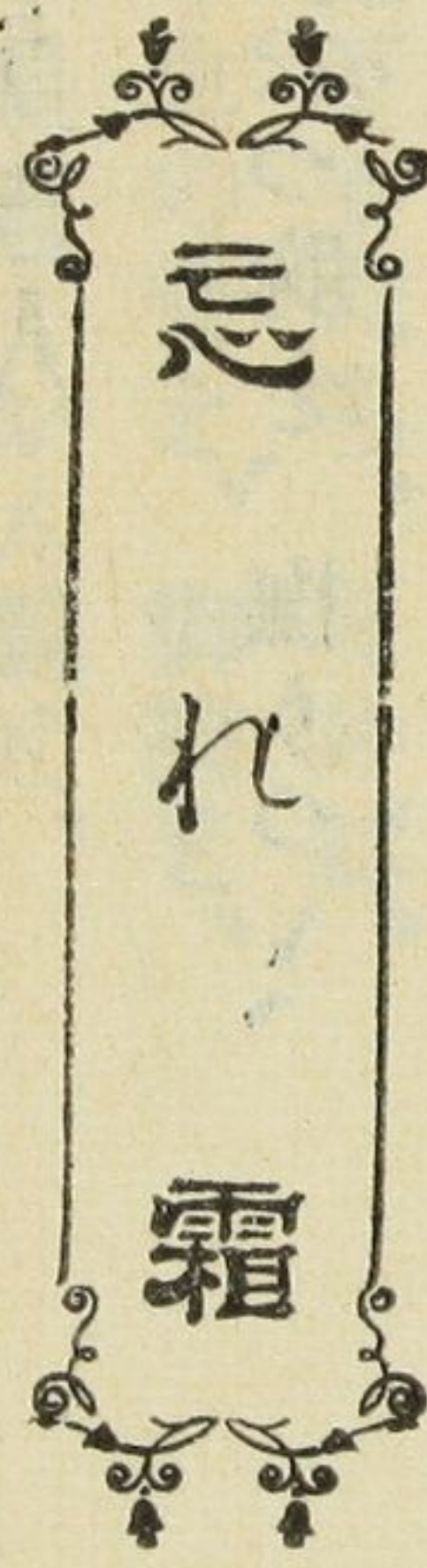
大海原のゆうふまぐれ、  
 島山あわくかすみつゝ、  
 漕ぎ歸るらんあま小舟。  
 行方もわかずなりにける。

眺み遙かに吹きて去る、  
 潮の風のはまださむく、  
 ふなばたをかむ波の音、  
 旅人のむねに響くかな。

あはれ汐風いさぎよし。  
 あはれ波の音心地よし。  
 長く打たれて譯もなく、  
 湧んかどすらんわが涙。



みやこにはるの夢さめて、  
ふるさと遠くかへり行く、  
あきらめ果しうつし世に、  
玄のぶる方もなかる身の。



英雄の事業

桐生悠々

颯風颯と、見るからに、  
樹を抜き、家を蹴倒して、  
猛獸鷲鳥の夢破る。

とばかりありて、月は出ぬ。



見渡たす花野、幾千里。  
物の影なく、寂又寞。

入 相

都の塵に、衣を拂ひ、  
逃げ來し濱に、足を洗へば、  
村の寺々、入相の鐘。

うき人

燃わたつ胸を、撫りつゝ、

庭に下りたち、イめば、  
鳴く虫の音を、御聲と、  
瞬く星を、おん貌と、  
見るとはなしに、見られけり。

聞くとはなしに、聞かれけり。  
死ぬる思を、くみもせで、  
すがる袂を、振り拂ひ、  
あだしをみな跡追ひし、  
つれなき人と、知りてだに。



## 秋の聲

さていかにせん、床の間に、  
 活けたる花は、散りてけり、  
 過ぎし逢夜に、懐かしき、  
 君の手づから活けまし。  
 其折、笑ひてのたまはく、  
 この花、咲きて散らんまで、  
 われ訪ひ來ずは、今宵より  
 永き別と、知れかしと、

戯なるか、眞かも、  
 思ひわかたず、日は經りて、  
 花は香も、いと高く、  
 唯おかしげに、咲き出でぬ。  
 あはれ、この花いつまでも、  
 咲きて散るなど、祈りにし、  
 そのかひもなく、徒らに  
 散り初めにける今宵哉。  
 うれし、門には靴音の、  
 止りし如き氣勢すよ。  
 胸躍らせて、迎ふれば、



更け行く空に月もなく、  
垣根に、虫の鳴きつれて、  
いづこともなく、秋の聲。

### 散る柳

明日は、我が夫、曉近く  
遠征の途にのぼらんとしつ。  
敵陣を衝き、討死するは、  
弓矢とる身の、さるべき習。  
今宵を、再びめぐり逢はぬ

長き別のかどでと知れば、  
明け難き夜の、明け易くして、  
驚破や、鶏鳴き、厩は明けぬ。  
嘶く駒に、促かされつゝ、  
眼を泣きはらしたる従卒の、  
つれなくも、はや迎とて來ぬ。  
脊子は、泣くわにももえいはず、  
鞍にひらりと、跨り給へば、  
天晴れ、勇ましき武者ぶりも、  
今ぞ、見かさめと門に倚つて、  
見おくる脊子が鎧の袖に、



柳散りく秋の風吹く。

### 初日影

我が身のほどを、忘れつゝ、  
贈りぬ、文を、百千度。  
しかはあれども、一首の  
返歌もなくて、年は暮れぬ。  
あはれ、この月は、うき人の  
枕照らせよ、初日影。

### 小按摩

女の童等は、蝶のごと、  
男の童等は、蜂のごと、  
また花のごと、鳥のごと、  
羽子を追ひぬ。紙鳶あげぬ。  
うれしささまを、見まほしく、  
通りかゝりし小按摩の、  
杖を止めて、見ぬ眼を、  
ひき出しては、歩を運ぶ、



足に穿きたる足駄ばかり、  
嗟、新玉の春日かな。

### 田舎娘

(グライム)

美しき田舎娘の姿かな。

町廣けれど及ぶべき、

美女は一人も見ざりけり。

見るからにはれくしくづなりにける。

やよ乙女子よなが貌は

なぜにかうしも無邪氣なる。

身をめぐる血はなごかうも静かなる。

田舎娘よやよなれは、

なぜにかうしもゆたかなる。

今は我れなれを十度は見たりけり。

やよ乙女子よ其度に。

美しどのみつぶやさぬ。

今は我れなれを十度は試みぬ。



田舎娘よやよなれが、  
心のかくも美しき。

乙女子よ我れは熟思ふかな、  
女はかくてあるべきと。  
思にあたるなれがふり。

いかなれば我れはかうしも思ふらむ。  
珠の光とめでねども、  
書の中の書と喜びつ。

好物の胡桃の實のみ食ひつゝ、  
穀は捨てけり好みては。  
またパウルスとシラは讀む。

來たまへど我れ果ては問ふ、願くば、  
やさしきものよ我が家に。  
可愛き乙女我が家に。

なは何と田舎娘よ答へける。  
母がり走りおどなく、  
ハイと答はなさいりき。



愛らしき田舎娘のうたてなる。

思に沈む我れ一人、

跡に残してはせ去るぞ。

發　　見　　（ゲーテ）

唯飄然と宿をし出て、

物思ひつゝ、森にぞ來ける。

とみれば暗き林の影に、

花ぞありける乙女の如き。

折らむとすれば静にいはく、

「我はそもしほれむために

折らるゝか」

さて根を掘りて携へ歸り、

美しき家の園生に植へぬ。

なほ静なるところに移せば、

今は榮えて花咲きにけり。



## 離 別

(ウーランド)

おさらばさらば戀人よ、

今日しも袖を分たなむ。

一度キスを與へかし。

またの逢瀬もあらざれば。

庭木に咲ける花一枝、

その花一枝贈れかし。

木の實は我れに用がなき。

そを俟つひまもあらざれば。

## 雨 の 日

(ロングフェル)

寒けく暗くまた凄まじく、

時雨る、軒に風叫ぶ。

破る、壁に葛はし這へど、

風吹く毎に枯れ葉は散りぬ。

寒けく暗くまた凄まじく、

時雨る、軒に風叫ぶ。

破る、過去に心は繫けど、

風吹く毎に望は消えぬ。



請ふ愁客よ歎くを止めよ。  
雪を隔て、日は照りぬ。  
誰か行く道にも時雨は降りて、  
寒けく暗き冬空がある。

# 山高水長 終

明治三十一年一月二日印刷  
明治三十一年一月五日發行

《正價金二十錢》

編纂兼  
發行者

石橋哲次郎

本郷區春木町貳丁目廿三番地

發行所

増子屋書店

神田區南神保町拾一番地

印刷者

熊田宜遜

神田區錦町三丁目廿五番地

印刷所

熊田活版所

神田區錦町三丁目廿五番地

神田區仲猿樂町岡崎屋書店

賣捌人 山本 鏢藏



大賣捌所

神田 東京堂 京橋 東海堂

京橋 北隆館 銀座 文海堂

三田 福島書店 全 岸田書店

本郷 田中書店 本郷 盛春堂書店

牛込 盛文堂 銀座 服部書店

神田 有斐閣雜誌店 神田 松江堂

神田 中西屋